

Operations Manager 2007 R2 Connectors 展開ガイド

Microsoft Corporation

公開日: 2009 年 7 月

フィードバック

このドキュメントに関するご意見、ご感想は、[momdocs@microsoft.com までお寄せください。](mailto:momdocs@microsoft.com?subject=Feedback%20about%20the%20Operations%20Manager%20Connectors%20Deployment%20Guide). フィードバックには製品ガイド名を明記してください。

このドキュメントに含まれている情報は、公開日当時に話し合われている問題に関し Microsoft Corporation が見解を表すものです。Microsoft では変化し続ける市況に対応する必要があることから、Microsoft 側が保証するものと解釈されるべきではなく、Microsoft は公開日以降に明らかにされた一切の情報に関しての正確性を保証致し兼ねます。

このドキュメントはあくまでも情報提供のみを目的としています。Microsoft は明示的か暗示的かを問わず、ドキュメントの内容について一切保証しません。

適用されるすべての著作権関連法規に従うことはお客様の責任です。このドキュメントのいかなる部分も、米国 Microsoft Corporation の書面による許諾を受けることなく、その目的を問わず、どのような形態であっても、複製または譲渡することは禁じられています。ここでいう形態とは、複写や記録など、電子的な、または物理的なすべての手段を含みます。ただしこれは、著作権法上のお客様の権利を制限するものではありません。

マイクロソフトは、このドキュメントに記載されている内容に関し、特許、特許申請、商標、著作権、またはその他の無体財産権を有する場合があります。別途マイクロソフトのライセンス契約上に明示の規定のない限り、このドキュメントはこれらの特許、商標、著作権、またはその他の無体財産権に関する権利をお客様に許諾するものではありません。

別途記載されていない場合、このソフトウェアおよび関連するドキュメントで使用している会社、組織、製品、ドメイン名、電子メール アドレス、ロゴ、人物、場所、出来事などの名称は架空のものです。実在する会社、組織、製品、ドメイン名、電子メール アドレス、ロゴ、人物、出来事とは一切関係ありません。

© 2009 Microsoft Corporation.All rights reserved.

Microsoft、Active Directory、ActiveSync、Internet Explorer、JScript、SharePoint、SQL Server、Visio、Visual Basic、Visual Studio、Win32、Windows、Windows PowerShell、Windows Server、および Windows Vista は Microsoft グループの商標です。

その他の商標はそれぞれの所有者に帰属します。

改訂履歴

|  |  |
| --- | --- |
| リリース日 | 変更内容 |
| 2009 年 7 月 | 本ガイドの最初のリリース |

コンテンツ

[Operations Manager 2007 R2 Connectors 展開ガイド 5](#_Toc237712103)

[Operations Manager 2007 R2 Connectors の概要 5](#_Toc237712104)

[コネクタ展開前の考慮事項 9](#_Toc237712105)

[コネクタのインストール 12](#_Toc237712106)

[リモート システム用コネクタ コンポーネントのインストール 13](#_Toc237712107)

[Operations Manager 2007 R2 用コネクタ コンポーネントのインストール 18](#_Toc237712108)

[コネクタの構成 28](#_Toc237712109)

[通信用にサーバーを構成する 29](#_Toc237712110)

[Operations Manager 2007 R2 アラートを転送用に構成する 35](#_Toc237712111)

[高可用性の構成 41](#_Toc237712112)

[Universal Connector の使用 43](#_Toc237712113)

[コネクタ転送の制御 47](#_Toc237712114)

[Operations Manager 2007 R2 製品コネクタ配信登録ウィザードを使用する 49](#_Toc237712115)

[コネクタ サービスの停止または開始 50](#_Toc237712116)

[付録 A - BMC Remedy ARS Connector 51](#_Toc237712117)

[付録 B - HP Operations Manager Connector 56](#_Toc237712118)

[付録 C - IBM Tivoli Enterprise Console Connector 56](#_Toc237712119)

[付録 D - Universal Connector 58](#_Toc237712120)

Operations Manager 2007 R2 Connectors 展開ガイド

Operations Manager 2007 R2 Connectors の概要

Microsoft System Center Operations Manager 2007 R2 Connectors は、Enterprise Management System (EMS) やヘルプ デスク システムなど、リモート システムへの Operations Manager 2007 R2 アラート転送を提供します。Operations Manager 2007 R2 がアラートをリモート システムに転送すると、アラートの有効期間中そのアラート データが同期されます。

データ同期によって、堅牢でシームレスなシステム管理環境がもたらされます。そのような環境によって、以前は独立していたサポート グループのリソースや利点を組織間サポート プロセスで活用することができます。究極的には、組織間での通信が改善することでエンタープライズ システムのヘルスが向上します。

Operations Manager 2007 R2 とリモート システム間でデータを共有することで、Windows ベース システム、ハードウェア、ネットワークおよび UNIX システムからのイベントを企業内で相互に関連付けることが可能になります。これらのイベントを相互に関連付けることで、IT スタッフは問題の原因を判断し、IT の機能停止の解決時間を短縮できます。

また Operations Manager 2007 R2 とリモート システム間でデータを同期することで、オペレーション グループが慣れ親しんだ管理インターフェイスを使用できるようになります。ユーザーはその管理ツールを使うことでアラートを更新し、データはその他のオペレーション グループで使用するツールで更新されます。

現在利用可能なコネクタ

次のコネクタが現在展開可能です。

Connector for BMC Remedy ARS

|  |
| --- |
| BMC Remedy Action Request System (ARS) 用の Operations Manager 2007 Connector |

Connector for HP Operations Manager

|  |
| --- |
| HP Operations Manager (旧 HP OpenView Operations) 用 Operations Manager 2007 R2 Connector |

Connector for IBM Tivoli Enterprise Console

|  |
| --- |
| IBM Tivoli Enterprise Management Console 用 Operations Manager 2007 R2 Connector |

Universal Connector

|  |
| --- |
| Windows システムまたはサポートされている UNIX システムでホストされるすべてのリモート システムでインストールおよび構成できる可能性のある Operations Manager 2007 R2 Connector。 |

機能

 Operations Manager 2007 R2 アラートはリモート システムに転送されます。

 Operations Manager 2007 R2 アラートは、その有効期間中、リモート システムと同期されます。

 リモート システム サーバーをバックアップするフェイルオーバーがサポートされています。

 高可用性機能では、コネクタ ドメインの他のサーバーにインストールされたセカンダリ コネクタへのフェイルオーバーもサポートします。

 単一リモート システムと通信する複数の Operations Manager 2007 R2 管理グループがサポートされています。

 複数の異なるリモート システムを、1 つの コネクタ 管理グループにインストールした複数のコネクタでサポートすることができます。

 Operations Manager 2007 R2 アラートの配信は、リモート システムからの確認を要求することで保証されます。

 コネクタ コンソールに統合される Operations Manager 2007 R2 ユーザー インターフェイスには、次の機能が付いています。

 コネクタ ヘルス状態を Operations Manager 2007 R2 管理パックを使用して コネクタ コンソール内で監視できます。

 コネクタ 構成は、Operations Manager 2007 R2 管理者のみが行えます。

 Operations Manager 2007 R2 サーバー、リモート システム サーバー、および高可用性コネクタを通信用に構成することができます。

 アラート転送はアラート フィールドを選択し、重要度および解決状態をリモート システムの同等項目にマッピングすることで構成します。

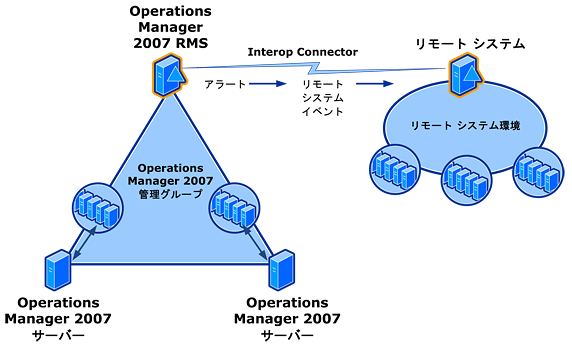
 選択したアラートを手動で Operations Manager 2007 R2 コンソールから転送することができます。

 Operations Manager 2007 R2製品コネクタ配信登録ウィザードを使用すると、Operations Manager 2007 R2 アラートを自動転送できます。

 製品コネクタ配信登録ウィザードでは、複数のコネクタのアラート転送を分離することができます。

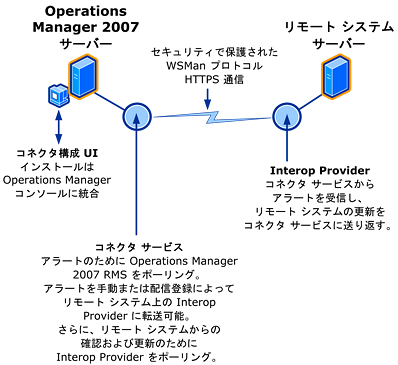
製品アーキテクチャ

Operations Manager 2007 Connectors アーキテクチャ



ソリューション コンポーネント

Operations Manager 2007 Connectors コンポーネント



展開された各 Operations Manager 2007 R2 Connector には、次のコンポーネントがあります。

 Interop Provider – このサービスはサポートされているリモート システム環境で Windows または UNIX サーバーにインストールされ、インストール後自動的に起動します。Interop Provider は Operations Manager 2007 R2 環境でコネクタ サービスからアラートを受信し、それをそのシステムの API を介してサポートされたリモート システムに転送します。Interop Provider はまたコネクタ サービスにそれらのイベントに関する更新を送り返します。

 コネクタ サービス – このサービスは、Operations Manager 2007 R2 環境でサーバーにインストールされ、構成が完了すると自動的に起動します。コネクタ サービスは Operations Manager 2007 R2 RMS からアラートを収集し、リモート システム サーバーにインストールされた Interop Provider に転送します。コネクタ サービスでは、Operations Manager アラートから作成されたリモート システム イベントに関する Interop Provider からの更新も受信します。

 [コネクタ構成 UI] – この構成ダイアログ ボックスは、Operations Manager 2007 R2 コンソールがインストールされているサーバーにインストールされ、そのコンソールに統合されたコンポーネントになります。[Connector 構成] ダイアログ ボックスを使って、Operations Manager 2007 R2 サーバーとリモート システム サーバーの通信を構成します。[Connector 構成] ダイアログ ボックスにあるタブは、Operations Manager アラートプ ロパティをリモート システムのイベントのプロパティにマッピングし、高可用性機能を構成するのにも使用されます。

コネクタ展開前の考慮事項

このセクションでは、Microsoft System Center Operations Manager 2007 R2 Connectors を Operations Manager 2007 R2 環境とサポートされているリモート システム環境の両方にインストールする前に考慮すべき事項を説明します。

システム要件

Operations Manager 2007 R2 Connectors をインストールするには、次のシステム要件が必要になります。Interop Provider とリモート システム環境での要件、Operations Manager 2007 環境での要件の順に挙げていきます。リモート システムの要件には、Windows ベースのサーバーおよび UNIX ベースのサーバーでインストールするケースが含まれます。

Operations Manager 2007 R2 環境のシステム要件

 Operations Manager 2007 R2 Connector で動作するように Operations Manager 2007 R2 をインストールする必要があります。以前の Microsoft コネクタがあるシステムのアップグレードはありません。以前のベータ版 Microsoft コネクタはアンインストールして、必要なコネクタを Operations Manager 2007 R2 環境に新しく展開する必要があります。これには新しいコネクタ サービス、コネクタ構成 UI、Interop Provider、コネクタ管理パックのインストールが含まれます。

 コネクタ サービスと構成 UI コンポーネントは、Windows Server 2003 SP1 以降または Windows Server 2008 オペレーティング システムを実行するコンピューターにインストールする必要があります。

 さらに、コネクタ構成 UI コンポーネントは、Operations Manager 2007 R2 オペレーション コンソールがインストールされているサーバーにインストールする必要があります。

重要

Interop Provider コンポーネントは、コネクタ サービス コンポーネントの前にインストールする必要があります。

注

コネクタ サービス、Interop Provider、コネクタ構成 UI コンポーネントは、同一のサーバーにインストールする必要はありません。

コネクタ サービスと Interop Provider コンポーネントは別々のサーバーにインストールすることをお勧めします。

コネクタ サービス コンポーネントは、Operations Manager 2007 R2 サーバーにインストールする必要はありませんが、Operations Manager 2007 R2 ルート管理サーバー (RMS) のドメインまたは信頼されたドメインにあるサーバーにインストールする必要があります。

コネクタ構成 UI コンポーネントは、Operations Manager 2007 R2 RMS にインストールする必要はありませんが、オペレーション コンソールがインストールされたサーバーにインストールする必要があります。

 Microsoft SQL Server 2005 のインスタンスは、指定された Operations Manager 2007 R2 ドメインで利用可能である必要があります。

重要

SQL Server または SQL Server のインスタンスは、SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CI\_AS の照合順序になっている必要があります。SQL Server をインストールするときに照合順序を設定します。既存の SQL Server インストールを使用している場合は、サーバーの照合順序が SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CI\_AS となっていることを確認する必要があります。

SQL Server の照合順序を確認するには

|  |
| --- |
| 1. SQL Server Management Studio を開きます。  2. コネクタ データベースをインストールする、SQL Server 実行コンピューターに接続します。  3. SQL Server Management Studio の左側のウィンドウで、サーバー名を右クリックしてから、[プロパティ] を選択します。  4. [サーバーのプロパティ] 画面の左側のウィンドウで [全般] を選択します。  5. 右側のウィンドウで [サーバーの照合順序] を確認します。 |

 .NET Framework 3.0 SP1 または それ以降のバージョン.NET Framework バージョン 3.0 SP1 のダウンロードについては、[http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=120658 を参照してください。](http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=120658). .NET Framework 3.0 は、コネクタ サービスがインストールされるサーバーのみで必要です。 .NET Framework 3.0 は、別途インストールされる場合、コネクタ 構成 UI コンポーネントでは不要です。

 Visual C++ 2008 がインストールされていない場合は、Microsoft Visual C++ 2008 再頒布可能パッケージ (x86) の英語版。英語版は、Microsoft Visual C++ 2008 の他のバージョンと並行してインストールすることができます。Visual C++ 2008 再頒布可能パッケージ (x86) のダウンロードについては、[http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=117778 を参照してください。](http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=117778)

 WS-Management 1.1。WS-Management 1.1 のダウンロードについては、[http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=84599 を参照してください。](http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=84599).

Windows 上のリモート システムのシステム要件

 Interop Provider コンポーネントは、Windows Server 2003 または Windows Server 2008 を実行するサーバーにインストールする必要があります。

重要

Interop Provider コンポーネントは、コネクタ サービス コンポーネントの前にインストールする必要があります。

重要

Interop Provider コンポーネントは、HP Operations Manager Connector および IBM Tivoli Enterprise Console Connector のリモート システム プライマリ管理サーバーにインストールする必要があります。Remedy Interop Provider コンポーネントは、Remedy User アプリケーションがインストールされているコンピューターであればどのコンピューターにでもインストールできます。

重要

HP Operations Manager Connector、BMC Remedy ARS 6.3 Connector および IBM Tivoli Enterprise Console Connector 用の Interop Provider コンポーネントは、Windows Server 2003 オペレーティング システムでのインストールについてのみ検証が行われます。BMC Remedy ARS 7.1 Connector および Universal Connector の Interop Provider コンポーネントは、Windows Server 2003 オペレーティング システムおよび Windows Server 2008 オペレーティング システムインストールについて検証が行われます。

 Visual C++ 2008 がインストールされていない場合は、Microsoft Visual C++ 2008 再頒布可能パッケージ (x86) の英語版。英語版は、Microsoft Visual C++ 2008 の他のバージョンと並行してインストールすることができます。Visual C++ 2008 再頒布可能パッケージ (x86) のダウンロードについては、[http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=117778 を参照してください。](http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=117778)

 WS-Management 1.1。WS-Management 1.1 のダウンロードについては、[http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=84599 を参照してください。](http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=84599).

UNIX 上のリモート システムのシステム要件

次に、UNIX システムでホストされるリモート システムのすべてのケースに該当する UNIX システム要件を示します。

注

Interop Provider コンポーネントは、HP Operations Manager Connector および IBM Tivoli Enterprise Console Connector のリモート システム プライマリ管理サーバーにインストールする必要があります。

次の表に、UNIX 上のリモートシステムの各コネクタでサポートされている各特定の UNIX システムを一覧表示します。

|  |
| --- |
| HP Operations Manager Connector |
| HP-UX 11i v3 (IA64) |
| HP-UX 11i v3 (PA-RISC) |
| HP-UX 11i v2 (IA64) |
| HP-UX 11i v2 (PA-RISC) |
| Solaris 10 (SPARC) |

|  |
| --- |
| IBM Tivoli Enterprise Console Connector |
| IBM AIX 5L 5.3、Technology Level 6、SP5 (PowerPC) |
| Solaris 10 (SPARC) |

|  |
| --- |
| Universal Connector |
| IBM AIX 5L 5.3、Technology Level 6、SP5 (PowerPC) |
| HP-UX 11i v3 (IA64) |
| HP-UX 11i v3 (PA-RISC) |
| HP-UX 11i v2 (IA64) |
| HP-UX 11i v2 (PA-RISC) |
| Solaris 10 (SPARC) |
| Red Hat Enterprise Linux Server release 5.1 (Tikanaga) |
| SUSE Linux Enterprise Server 10 SP1 (i586) |

コネクタのインストール

このセクションでは、Microsoft System Center Operations Manager 2007 R2 Connectors のすべてのコンポーネントを Operations Manager 2007 R2 環境とサポートされているリモート システム環境の両方にインストールする方法について説明します。

このセクションの内容

[リモート システム用コネクタ コンポーネントのインストール](#z054bc7b905fa469bab12dc945773c669)

|  |
| --- |
| サポートされているすべてのリモート システム環境に コネクタ コンポーネントをインストールする手順を示します。 |

[Operations Manager 2007 R2 用コネクタ コンポーネントのインストール](#z7d4b00c24fd6436084fa0f351b351b66)

|  |
| --- |
| Windows インストーラーまたはコマンドラインによるサイレント インストールを使用して コネクタ 環境に Operations Manager 2007 R2 をインストールする手順を示します。 |

リモート システム用コネクタ コンポーネントのインストール

このセクションでは、すべてのサポートされたリモート システムに Operations Manager 2007 R2 Connector コンポーネントをインストールする手順を説明します。Windows リモート システム環境では、インストールする唯一のコンポーネントは Interop Provider です。UNIX リモート システム環境では、追加のコンポーネント Interop Core を Interop Provider とともにインストールします。

さまざまなリモート システムに接続するため複数のコネクタが 1 つの Operations Manager 2007 R2 環境にインストールされている場合は、Interop Provider を各リモート システムに個別にインストールする必要があります。

重要

単一の Remedey システム用に複数の Remedy Interop Providers があるというシナリオはサポートされています。Remedy システムとの通信用に Remedy Connectors が複数の Operations Manager 2007 R2 サーバーにインストールされている場合は、単一の Provider インストールを行って通信する必要があります。

重要

Windows ベース環境でリモート システム用の Interop Provider をインストールするには、ユーザー アカウントに Interop Provider がインストールされるサーバーのローカル管理者特権が必要です。UNIX または Linux 環境でリモート システム用の Interop Provider をインストールするには、ユーザー アカウントにそのリモート システムのルート特権が必要です。

Windows ベースのコンピューターに Interop Provider をインストールするには

|  |
| --- |
| 1. 特定のリモート システム環境でのインストールに必要な特権レベルでログオンし、SciProviderSetup.msi ファイルにアクセスして実行し、Interop Provider セットアップ ウィザードを開始します。[開始] ページで、[次へ] をクリックします。  2. [使用許諾契約書] ページの内容を注意して読み、[同意します] をクリックしてから、[次へ] をクリックして続行します。  3. [プロバイダーの選択] ページには、Operations Manager 2007 R2 Connectors でサポートされている Interop Providers の一覧が表示されます。既定では、Interop Universal Provider が選択されています。インストールする Interop Provider を選択し、[次へ] をクリックします。  4. [カスタム セットアップ] ページで、インストールするコネクタの Interop Provider が選択されていることを確認します。すべてのケースで、Universal Connector Interop Provider コンポーネントを同時にインストールすることができます。選択が完了したら、[次へ] をクリックします。  5. [Microsoft Operations Manager 2007 Interop Providers のインストールの準備完了] ページで [次へ] をクリックして、Interop Provider のインストールを開始します。インストール中には、進行状況バーが表示されます。  6. [完了] ページで [完了] をクリックして、ウィザードを終了します。  注  BMC Remedy ARS Connector の Interop Provider のインストールでは、インストール後にシステムの再起動が必要です。  重要  コネクタ サービスをインストールして起動した後に Interop Provider をインストールすると、コネクタ サービスから送信された構成値は Interop Provider インストールによって上書きされます。たとえば、[Universal Connector 構成] ダイアログ ボックスで設定された [プロバイダーのファイル形式] の値は、Interop Provider インストールの既定値 “.evt” に設定されます。コネクタ サービスをインストールした後で Interop Provider をインストールする場合、Interop Provider インストール後にコネクタ サービスを停止し、再起動します。 |

Windows ベースのコンピューターで Interop Provider をアンインストールするには

|  |
| --- |
| 1. [スタート] メニューから、[コントロール パネル] をクリックし、[プログラムの追加と削除] を開きます。  2. [System Center Operations Manager 2007 Interop Provider2007] を選択し、[削除] をクリックします。 |

UNIX または Linux システムに Interop Provider をインストールする方法

UNIX プラットフォームに展開されたサポートされているリモート システムに Interop Provider コンポーネントをインストールするには、2 つのインストール部分が必要です。最初に Interop Core をインストールし、次に Interop Provider をインストールします。サポートされている UNIX または Linux プラットフォームおよびサポートされたリモート システムのそれぞれに固有の Interop Core と Interop Provider のパッケージのペアがあります。

次に示すのは、Operations Manager 2007 R2 Connector メディア上の UNIX および Linux のインストール パッケージです。それぞれのサポートされているオペレーティング システムとプロセッサ アーキテクチャの組み合わせの下に、Interop Core パッケージ ファイルが一覧表示され、そのプラットフォームで利用できる Interop Provider がその後に続きます。Interop Provider パッケージは、ファイル名に指定された “ovo”、“tec”、“unv” で識別されます。

IBM AIX 5L 5.3、Technology Level 6、SP5 (PowerPC)

|  |
| --- |
| scx-<ビルド番号>.aix.5.ppc.lpp.gz(Interop Core パッケージ)  scinterop-<ビルド番号>.aix.5.3.ppc-tec.lpp.gz  scinterop-<ビルド番号>.aix.5.3.ppc-unv.lpp.gz |

HP-UX 11i v2 (IA64)

|  |
| --- |
| scx-<ビルド番号>.hpux.11iv2.ia64.depot.Z(Interop Core パッケージ)  scinterop-<ビルド番号>.hpux.11iv2.ia64-ovo.depot.Z  scinterop-<ビルド番号>.hpux.11iv2.ia64-unv.depot.Z |

HP-UX 11i v2 (PA-RISC)

|  |
| --- |
| scx-<ビルド番号>.hpux.11iv2.parisc.depot.Z(Interop Core パッケージ)  scinterop-<ビルド番号>.hpux.11iv2.parisc-ovo.depot.Z  scinterop-<ビルド番号>.hpux.11iv2.parisc-unv.depot.Z |

HP-UX 11i v3 (IA64)

|  |
| --- |
| scx-<ビルド番号>.hpux.11iv3.ia64.depot.Z(Interop Core パッケージ)  scinterop-<ビルド番号>.hpux.11iv3.ia64-ovo.depot.Z  scinterop-<ビルド番号>.hpux.11iv3.ia64-unv.depot.Z |

HP-UX 11i v3 (PA-RISC)

|  |
| --- |
| scx-<ビルド番号>.hpux.11iv3.parisc.depot.Z(Interop Core パッケージ)  scinterop-<ビルド番号>.hpux.11iv3.parisc-ovo.depot.Z  scinterop-<ビルド番号>.hpux.11iv3.parisc-unv.depot.Z |

Solaris 10 (SPARC)

|  |
| --- |
| scx-<ビルド番号>.solaris.10.sparc.pkg.gz(Interop Core パッケージ)  scinterop-<ビルド番号>.solaris.10.sparc-ovo.pkg.gz  scinterop-<ビルド番号>.solaris.10.sparc-tec.pkg.gz  scinterop-<ビルド番号>.solaris.10.sparc-unv.pkg.gz |

Red Hat Enterprise Linux Server release 5.1 (Tikanaga)

|  |
| --- |
| scx-<ビルド番号>.rhel.5.x86.rpm(Interop Core パッケージ)  MSFTscinteropUnv-<ビルド番号>.rhel.5.x86.rpm |

SUSE Linux Enterprise Server 10 SP1 (i586)

|  |
| --- |
| scx-<ビルド番号>.sles.10.x86.rpm(Interop Core パッケージ)  MSFTscinteropUnv-<ビルド番号>.suse.10.x86.rpm |

インストールする適切なパッケージ ファイルを選択してから、UNIX プラットフォームの /tmp ディレクトリにファイルをコピーします。パッケージ ファイルを /tmp ディレクトリにコピーした後、各パッケージのインストールにはさらに 2 つの手順があります。

1. パッケージ ファイルを圧縮解除または解凍します。

2. パッケージからファイルをアンパックしてインストールします。

次に、サポートされる各オペレーティング システムでこれらの手順を実行するコマンドを示します。すべてのサンプルでは、例として Universal Connector パッケージを使用します。提供された例以外のコネクタをインストールするには、該当するコネクタについて次の大文字と小文字を区別した ID で文字列 “Unv” を置換します。

“Ovo”   HP Operation Manager Connector (元の HP OpenView Operations) の場合

“Tec”        IBM Tivoli Enterprise Console Connector 用

各ケースの最後のコマンドは、Interop Provider のアンインストール コマンドです。

IBM AIX 5L 5.3、Technology Level 6、SP5 (PowerPC)

|  |
| --- |
| 1. Interop Core を解凍、アンパック、インストールするには  gzip -d /tmp/scx-<ビルド番号>.aix.5.pcc.lpp.gz  installp -X -d /tmp/scx-<ビルド番号>.aix.5.ppc.lpp scx.rte  2. Interop Provider を解凍、アンパック、インストールするには  gzip –d /tmp/scinterop-<ビルド番号>.aix.5.3.pcc-unv.lpp.gz  installp -X -d /tmp/scinterop-<ビルド番号>.aix.5.3.ppc-unv.lpp MSFTscinteropUnv.rte  3. アンインストールするには  installp –u MSFTscinteropUnv.rte  installp –u scx.rte |

HP-UX 11i v3 (IA64)

|  |
| --- |
| 1. Interop Core を解凍、アンパック、インストールするには  uncompress /tmp/scx-<ビルド番号>.hpux.11iv3.ia64.depot.Z  swinstall -s /tmp/scx-<ビルド番号>.hpux.11iv3.ia64.depot scx  2. Interop Provider を解凍、アンパック、インストールするには  uncompress /tmp/scinterop-<ビルド番号>.hpux.11iv3.ia64-unv.depot.Z  swinstall -s /tmp/scinterop-<ビルド番号>.hpux.11iv3.ia64-unv.depot scx  3. アンインストールするには  swremove MSFTscinteropUnv  swremove scx |

HP-UX 11i v3 (PA-RISC)

|  |
| --- |
| 1. Interop Core を解凍、アンパック、インストールするには  uncompress /tmp/scx-<ビルド番号>.hpux.11iv3.parisc.depot.Z  swinstall -s /tmp/scx-<ビルド番号>.hpux.11iv3.parisc.depot scx  2. Interop Provider を解凍、アンパック、インストールするには  uncompress /tmp/scinterop-<ビルド番号>.hpux.11iv3.parisc-unv.depot.Z  swinstall -s /tmp/scinterop-<ビルド番号>.hpux.11iv3.parisc-unv.depot –x ask=true MSFTscinteropUnv  3. アンインストールするには  swremove MSFTscinteropUnv  swremove scx |

Solaris 10 (SPARC)

|  |
| --- |
| 1. Interop Core を解凍、アンパック、インストールするには  gzip –d /tmp/scx-<ビルド番号>.solaris.10.sparc.pkg.gz  pkgadd -d /tmp/scx-<ビルド番号>.solaris.10.sparc.pkg MSFTscx  2. Interop Provider を解凍、アンパック、インストールするには  gzip –d /tmp/scinterop-<ビルド番号>.solaris.10.sparc-unv.pkg.gz  pkgadd -d /tmp/scinterop-<ビルド番号>.solaris.10.sparc-unv.pkg MSFTscinteropUnv  3. アンインストールするには  pkgrm MSFTscinteropUnv  pkgrm MSFTscx |

Red Hat Enterprise Linux Server release 5.1 (Tikanaga)

|  |
| --- |
| 1. Interop Core をインストールするには  rpm -i scx-<ビルド番号>.rhel.5.x86.rpm  2. Interop Provider をインストールするには  rpm –i MSFTscinteropUnv-<ビルド番号>.rhel.5.x86.rpm  3. アンインストールするには  rpm –e MSFTscinteropUnv  rpm –e scx |

SUSE Linux Enterprise Server 10 SP1 (i586)

|  |
| --- |
| 1. Interop Core をインストールするには  rpm -i scx-<ビルド番号>.sles.10.x86.rpm  2. Interop Provider をインストールするには  rpm –i MSFTscinteropUnv-<ビルド番号>.suse.10.x86.rpm  3. アンインストールするには  rpm –e MSFTscinteropUnv  rpm –e scx |

注

UNIX または Linux で Interop Provider のインストールが完了すると、Interop Provider が実行されます。

Operations Manager 2007 R2 用コネクタ コンポーネントのインストール

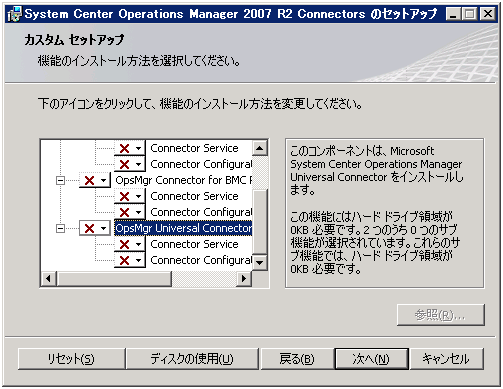
このセクションでは、Operations Manager 2007 R2 Connector 環境に Operations Manager 2007 R2 コンポーネントをインストールする手順を説明します。コネクタ サービスとコネクタ構成 UI コンポーネントを同時にインストールする場合は、Operations Manager 2007 R2 コンソールがインストールされたサーバーにインストールを行う必要があります。これは、コネクタ構成 UI インストールは Operations Manager 2007 R2 オペレーション コンソールに統合されているためです。コネクタ構成 UI コンポーネントを別にインストールする場合は、コネクタ サービスコンポーネントは、Operations Manager 2007 R2 ルート管理サーバー (RMS) のドメインまたはその信頼されたドメインのサポートされている構成の任意のコンピューターにインストールできます。

コマンドライン サイレント インストールの詳細については、このトピックで後述される「Operations Manager 2007 コネクタ コンポーネントをインストールするには」セクションの最後を参照してください。

重要

Interop Provider コンポーネントは、コネクタ サービス コンポーネントの前にインストールする必要があります。

インストール ウィザードの [カスタム セットアップ] ページ



コンピューターにコネクタ サービスを初めてインストールする場合は、[カスタム セットアップ] ページが [開始] と [使用許諾契約書] ページの後に表示されます。既定では、すべてのコネクタの全コンポーネントが [すべての機能が利用できなくなります ] に指定されています。インストールするコネクタとコンポーネントを選択します。

インストール ウィザードの [インストールの変更、修復、または削除] ページ



コンピューターに少なくとも 1 つコネクタ サービスがインストールされている場合、インストールを実行すると、[開始] ページの後に、[インストールの変更、修復、または削除] ページが表示されます。[削除] ボタンは、Operations Manager 2007 R2 管理グループに現在インストールされているすべてのコネクタを削除します。このリリースでは、[修復] ボタンは無効になっています。[変更] ボタンを使うと [カスタム セットアップ] ページが開き、現在インストールされているコネクタが [すべての機能がローカル ハード ディスク上にインストールされます] に指定されています。[すべての機能がローカル ハード ディスク上にインストールされます] の指定を維持したいインストール済みのコネクタをすべてそのままにして、インストールしたいその他のコネクタも [すべての機能がローカル ハード ディスク上にインストールされます] に指定します。

重要

以前にインストールしたコネクタを [すべての機能が利用できなくなります] に指定すると、それらのコネクタがアンインストールされます。

Operations Manager 2007 Connector コンポーネントをインストールするには

|  |
| --- |
| 1. 管理者または適切な権限でログインして、SciConnectorSetup\_x86.msi ファイルまたはSciConnectorSetup\_x86.msi ファイルにアクセスして実行し、Operations Manager 2007 R2 Connector インストーラーを起動します。  32 ビット システムのコンピューターでは、SciConnectorSetup\_x86.msi ファイルを使用します。Itanium 以外の 64 ビット システムのコンピューターでは、SciConnectorSetup\_x64.msi ファイルを使用します。  重要  次の権限があるユーザー アカウントでは、コネクタ 環境にコネクタをインストールする必要があります。   アカウントには、ローカル システムとローカル セキュリティ ポリシーに対するローカル管理者特権が必要です。アカウントには、サービス特権としてログオンの承認も必要です。   アカウントには Operations Manager 2007 R2 管理者特権が必要です。   アカウントには、関係するすべてのデータベースの SQL DBO 特権が必要です。   このトピックで前述した特権のあるドメイン アカウントは、高可用性コネクタの展開など、コンポーネントや機能が異なるシステムにある場合に必要です。  [開始] ページで、[次へ] をクリックします。  2. [使用許諾契約書] ページで、[同意します] をクリックしてから、[次へ] をクリックして続行します。  3. [カスタム セットアップ] ページに、コネクタとそのコンポーネントの選択ツリーが表示されます。既定では、リモート システム コネクタとそのコンポーネントはすべて [すべての機能が利用できなくなります] に指定されています。コネクタを有効にするには、コネクタ名の横にある下矢印をクリックして、インストールするコネクタを選択し、[すべての機能がローカル ハード ディスク上にインストールされます] を選択します。  コネクタ構成 UI コンポーネントを [すべての機能が利用できなくなります] に指定して、後でそれを異なる Operations Manager 2007 R2 サーバーにインストールすることができます。コネクタ構成 UI コンポーネントは、Operations Manager 2007 R2 コンソールがインストールされているサーバーにインストールする必要があります。  インストールするコネクタを選択すると、現在選択されているコネクタの場所が [インストール フォルダー] ボックスに表示されます。[参照] をクリックして変更を行います。  重要  インストールされた各コネクタの管理パックは、コネクタ構成ウィザード実行時に Operations Manager 2007 R2 RMS にインポートされます。コネクタの最初のインスタンスを展開するときに、コネクタの共通ライブラリ管理パックがインポートされます。これは、個々の特定リモート システム管理パックの親管理パックです。特定のリモート システム管理パックは、それぞれのコネクタ展開でインポートされます。コネクタ管理パックの詳細については、『Connectors Management Pack Guide for Operations Manager 2007 (Operations Manager 2007 のコネクタ管理パックガイド)』（英語版の可能性があります） を参照してください。  重要  同じインストール セッションで 1 つ以上のリモート システム用コネクタを選択してインストールすることができます。1 つ以上のリモート システム コネクタを Operations Manager 2007 R2 管理パックにインストールする際のアラート転送の配信登録構成に関する詳細については、「[Operations Manager 2007 R2 製品コネクタ配信登録ウィザードを使用する](#z1781fb3a00ba4b9fa40923a7f5064b3c)」を参照してください。  インストールするコネクタとコンポーネントを設定したら、[次へ] をクリックします。  4. [SQL サーバー構成] ページで、次の情報を入力します。   [サーバー名]: Operations Manager 2007 R2 RMS のドメインまたは信頼されたドメイン内での SQL Server のインスタンス。   [インスタンス名] (名前が付いているインスタンスのみに必要): SQL Server の指定インスタンスにおけるデータベースのインスタンス名。このデータベース名はサーバーと同一名にすることもでき、入力はオプションです。   [データベース名]: Operations Manager 2007 R2 Connectors 用に作成するデータベースの名前を入力します。それぞれの Operations Manager 2007 R2 管理グループには、すべてのコネクタ用にコネクタ データベースが 1 つだけ用意されています。高可用性機能用に同じ コネクタ 管理グループにインストールされた追加コネクタのインスタンスもこの同一のデータベースを使用します。　既にインストールされているコネクタがある場合は、コネクタ SQL データベースが存在します。指定を変更しないと、既定では、SCInterop という名前のローカル SQL データベースが作成されます。   [SQL Server ポート]: 既定値は 1433 です。  [次へ] をクリックして続行します。  5. [コネクタ サービス ログインと高可用性の構成] ページで、次の情報を入力します。   [ユーザー名]:既定では、Windows インストーラーを実行中のアカウントが表示されます。このアカウントには、コネクタ管理グループ用の System Center データ アクセスおよび System Center 管理構成へのアクセス権限が必要です。   [パスワード]:上記アカウントのパスワード。   [ドメイン]:既定では、コネクタ サービスをインストールするコンピューターのドメインが表示されます。コンピューターは、Operations Manager 2007 R2 RMS のドメインまたは信頼されたドメインにある必要があります。   [高可用性]:このチェック ボックスを使用して、高可用性コネクタのインストールとして指定します。高可用性機能の詳細については、「[高可用性の構成](#z7a75fad22da34a6b9f01ad5d9db35410)」を参照してください。  [次へ] をクリックして続行します。  6. サービス ログオン情報が有効であれば、[System Center Operations Manager 2007 R2 Connector インストールの準備完了] ページが表示されます。[インストール] をクリックして続行します。  7. [インストールしています] ページには、選択したすべてのコンポーネントのインストールが完了するまで、インストールの進行状況が表示されます。 |

Operations Manager 2007 Connector を構成するには

|  |
| --- |
| 1. コネクタ サービスのインストールが完了したら、コネクタ構成ウィザードの [コネクタの構成] ページが表示されます。インストール時のコネクタ構成ウィザードの実行はオプションです。ただし、コネクタ サービスを開始する前にコネクタ構成ウィザードを実行する必要があります。インストール時にコネクタ構成ウィザードを実行しない場合は、コネクタ サービスがインストールされたシステムの [スタート] メニューにウィザードを実行するためのアイコンが表示されます。  [コネクタの構成] ページには、サポートされている各コネクタのボタンがあります。インストールされたコネクタを構成するには、該当するコネクタのボタンをクリックします。[コネクタの構成] ページは、各構成が終わるたびに元に戻ります。複数のコネクタをインストールした場合は、インストールされたすべてのコネクタが構成されるまで、各コネクタをクリックします。  すべてのコネクタが完了した場合、またはコネクタの構成をスキップする場合は、[完了しました] をクリックします。  2. [<EMS> Connector 構成用 OpsMgr Connector] ダイアログ ボックスが表示されたら、次の情報を入力します。  [サーバー名] セクション:   [Operations Manager サーバー]:Operations Manager 2007 R2 管理グループ RMS の名前。   [<EMS> プロバイダ]:Interop Provider コンポーネントをインストールするリモート システム サーバーの名前。  重要  IP アドレスをサーバー名に使用しないでください。使用すると、証明書名に不一致が生じます。  [WS-Man サーバー資格情報] セクション:   [ユーザー名]:Web Services for Management (WS-Man) の十分な権限があるリモート システム サーバーのユーザー。Windows ベースのコンピューターの場合は、ローカル管理者アカウントとドメイン アカウントが両方サポートされています。ドメイン アカウントは、リモート システムの Administrators グループのメンバである必要があります。UNIX ベースのコンピューターの場合、ユーザーはリモート システム環境に対する十分な権限がある任意のアカウントです。   [パスワード]:ユーザーのパスワード。  重要  ユーザー名とパスワードは、標準 ASCII 文字の範囲 (32-127) 内である必要があります。  BMC Remedy ARS Connector の構成の場合、このダイアログ ボックスには [Remedy サーバー資格情報] セクションも含まれます。このセクションでは、次の情報を入力します。   [サーバー バージョン]:使用する ARS バージョンによって、サーバー バージョン一覧から V71 か V63 を選択します。   [ユーザー名]:これは、「[付録 A - BMC Remedy ARS Connector](#z91c6db10101f43a69fa7993de19929c4)」で opsmgr として指定した Remedy ユーザーです。   [パスワード]:ユーザーのパスワード。   [認証]:資格情報の認証システムが Remedy ARS に対して有効にされている場合、認証用に適切な文字列を入力します。認証システムを実装していない場合は、このボックスを空のままにしておきます。   [ホスト名]:BMC Remedy ARS がインストールされたコンピューターのサーバー名。  重要  ユーザー名とパスワードは、標準 ASCII 文字の範囲 (32-127) 内である必要があります。  [構成] をクリックして続行します。  3. コネクタ サービスの構成が完了したら、[コネクタ証明書の取得とインストール] ページが表示されます。  コネクタでは、Interop Provider を実行中のサーバーの信頼性を確認するため証明書を使用する必要があります。コネクタは、証明書が Interop Provider を実行中のサーバーからコネクタを実行中のサーバーに転送され、正しくインポートされるまで機能しません。Interop Provider インストール中に、自己署名証明書が生成され、Interop Provider インストール ディレクトリに格納されます。[コネクタ証明書の取得とインストール] ウィザードが証明書を取得し、コネクタを実行中のサーバーに自動的にインストールします。インストール時のコネクタ証明書のインストールはオプションです。ただし、コネクタ証明書は、コネクタ サービスを開始する前にコネクタを実行するサーバーにインストールする必要があります。Interop Provider 証明書をインストールしないと、コネクタは、Interop Provider を実行中のサーバーと通信できません。  注  自動インストール プロセスは、セキュリティで保護されていない場合があります。自動インポート プロセスを選択して続行する場合は、ウィザードで返される証明書の拇印が本物であることを確かめてください。  注  Interop Provider 証明書を転送する最もセキュリティの高い方法は、物理メディアを介して手動で行うことです。「コマンドライン インストールでコネクタ証明書をインストールする」を参照してください。  4. 既定では、自動インストールが選択されます。[次へ] をクリックして続行します。  5. コネクタ証明書がインストールされたら、[OK] をクリックして続行します。  注  Interop Provider 証明書は、インストールされた日から 3 年間有効です。期限が切れた証明書を交換するには、Interop Provider をアンインストールし、Interop Provider コンピューターで証明書を削除し、Interop Provider サービスを再インストールしてから、コネクタに新しい証明書を手動でインストールする必要があります。新しい証明書をインストールする方法に関する指示については、「コマンドライン インストールでコネクタ証明書をインストールする」を参照してください。  6. [完了] ページで [完了] をクリックして、セットアップ ウィザードを終了します。 |

コネクタをアンインストールするには

|  |
| --- |
| 1. Operations Manager 2007 R2 Connectors がコンピュータにインストールされている場合、管理者としてログインして、コネクタをアンインストールします。Windows の [プログラムの追加と削除] 機能か、コネクタ インストール ファイルである SciConnectorSetup\_x86.msi またはSciConnectorSetup\_x86.msiを使って、Operations Manager 2007 R2 Connectors インストール ウィザードを起動します。  2. 1 つ以上のコネクタがインストールされている場合、インストール ウィザードで [インストールの変更、修復、または削除] ページが表示されます。  [削除] をクリックして、インストールされたすべてのコネクタの削除を開始します。  [変更] をクリックして、特定のコンポーネントまたはコネクタを削除します。 |

コマンドライン サイレント インストールでコネクタをインストールする

コマンドライン プロパティを使用して、Microsoft Windows インストーラーで コネクタ セットアップ用 .msi ファイルを実行します。これによって監視されないスクリプト化されたインストールが可能になります。

重要

Microsoft Windows インストーラーのパブリック プロパティは、PROPERTY=value のように大文字である必要があります。Windows インストーラーの詳細については、次のページを参照してください。[http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=137320 (英語版の可能性があります）](http://go.microsoft.com/fwlink/?LinkId=137320).

Windows Server 2008 ベースのサーバーでサイレント インストールを実行するときは、まず管理者特権以外でのコマンド プロンプトから、すべてのユーザー アカウントに対してアプリケーションを広告する必要があります。Windows Server 2008 ベースのサーバーでてアプリケーションを広告する場合の構文は、次の例のようなコードになります。

msiexec /jm <.msi ファイル名>

<.msi ファイル名>

|  |
| --- |
| SciConnectorSetup\_x86.msi またはSciConnectorSetup\_x64.msi |

次のコード例は、サイレント インストール コマンドの構文です。

msiexec /i <.msi ファイル名> /qn /l\*v connectorinstall.log <必須プロパティ><REMEDY プロパティ><オプション プロパティ>

<.msi ファイル名>

|  |
| --- |
| SciConnectorSetup\_x86.msi またはSciConnectorSetup\_x64.msi |

<必須プロパティ>

|  |
| --- |
| SERVICE\_USER="<ユーザー名>" - コネクタ サービスをセットアップするのに使用するアカウント。  SERVICE\_DOMAIN="<ドメイン>" – コネクタ サービスをインストールするコンピューターのドメイン。  SERVICE\_PASSWORD=”<パスワード>” – コネクタ サービスをセットアップするのに使用するパスワード。  SQLSERVER=”<SQL サーバー名>” – コネクタ データベースを保持する SQL Server のインスタンス名。  OPSMGRSERVER=”<OpsMgr サーバー名>” – Operations Manager 2007 R2 RMS の名前。  PROVIDERSERVER=”<プロバイダー サーバー名>” – リモート プロバイダー サーバーの名前。  WSMANUSERNAME=”<WS-Man ユーザー名>” – 通信に使用するリモート システムのアカウント。  WSMANUSERPASSWORD=”<WS-Man パスワード>” – リモート システム通信アカウントのパスワード。  ADDLOCAL=”<Connector>,<ConnectorService>,<ConnectorUI>” – どのコネクタをインストールするかを識別する次の 4 つのプロパティのセットの 1 つ。  OVO、OVOService、OVOUI  TEC、TECService、TECUI  Universal、UniversalService、UniversalUI  Remedy、RemedyService、RemedyUI |

<REMEDY プロパティ>

|  |
| --- |
| REMEDYVERSION="<Remedy サーバー バージョン>" – 使用する Remedy ARS サーバーのバージョンを指定する列挙型。有効な値は、V63 または V71 です。  REMEDYUSERNAME="<Remedy ユーザー名>" – Operations Manager 2007 R2 コンソールで指定した Remedy ARS リモート システム通信アカウント。  REMEDYPASSWORD="<Remedy パスワード>" - Remedy ARS リモート システム通信アカウントのパスワード。  REMEDYAUTH=”<文字列>” - 資格情報の認証システムが Remedy ARS に対して有効にされている場合は、認証用に適切な文字列を入力します。認証システムが実装されていない場合は、このプロパティを使用する前に Remedy システム管理者に確認してください。  REMEDYSERVER="<Remedy サーバー名>" – Remedy ARS がインストールされたコンピューターのサーバー名。 |

<オプション プロパティ>

|  |
| --- |
| SQLINSTANCE=”<データベース インスタンス>” – 使用するデータベースのインスタンス名。既定では、既定インスタンスを使用します。  DBNAME=”<データベース名>” – コネクタ データベースに使用する名前。指定しないと、SCInterop が使用されます。  EMSPORT=”<ポート値>” – TEC Connector のみ。サーバー リスニング ポートを指定します。既定値は “0” で、これは UNIX プラットフォーム上でポート マッパーを使用する設定です。TEC の管理者が Windows オペレーティング システム上の TEC 用ポート値を提供できます。これは通常、“5529” になります。  SERVICE\_HA=”1” – このプロパティは高可用性コネクタをインストールする場合は設定する必要があります。 |

次に、x86 Windows ベース システム上の Remedy ARS サーバーのサイレント インストール コマンドの例を示します。

msiexec /qn /i SciConnectorSetup\_x86.msi /l\*v connector.log ADDLOCAL="Remedy,RemedyService,RemedyUI" SERVICE\_USER="user-name" SERVICE\_DOMAIN="domain" SERVICE\_PASSWORD="password" SQLSERVER="SQL-server-name" OPSMGRSERVER="OpsMgr-server-name" PROVIDERSERVER="Provider-server-name" EMSPORT="port-value" WSMANUSERNAME="WS-Man-user-name" WSMANUSERPASSWORD="WS-Man-password" REMEDYVERSION="Remedy-version" REMEDYUSERNAME="Remedy-user-name" REMEDYPASSWORD="Remedy-password" REMEDYAUTH="string" REMEDYSERVER="Remedy-server-name"

Remedy ARS サーバーで認証が構成されていない場合は、REMEDYAUTH パラメーターを使用する前に Remedy システム管理者に確認してください。

次に、x86 Windows ベース システム上の 高可用性 Universal Connector のサイレント インストール コマンドの例を示します。

msiexec /i SciConnectorSetup\_x86.msi /qn /l\*v connectorinstall.log SERVICE\_USER="user-name" SERVICE\_DOMAIN="domain" SERVICE\_PASSWORD=”<パスワード>” SQLSERVER=”<SQL サーバー名>” OPSMGRSERVER=”<OpsMgr サーバー名>” PROVIDERSERVER=”<プロバイダー サーバー名>” WSMANUSERNAME=”<WS-Man ユーザー名>” WSMANUSERPASSWORD=”<WS-Man パスワード>” ADDLOCAL=”Universal,UniversalService,UniversalUI” SERVICE\_HA=”1”

コマンドライン インストールで証明書をインストールする

コマンドライン アプリケーション、Scicert.exe を使って、コネクタ サーバーに Interop Provider 証明書をインストールします。Interop Provider 証明書をインストールすると、Interop Provider を実行中のサーバーとコネクタを実行中のサーバーの間でセキュリティで保護された通信が可能になります。ファイル Scicert.exe は Operations Manager 2007 R2 Connector インストール ディレクトリに格納されます。次のコード例は、証明書インストール コマンドの構文です。

scicert <ホスト> <ユーザー> <パスワード> <サービス名> [silent][test]

<必須プロパティ>

|  |
| --- |
| <host> – Interop Provider 証明書がインストールされている場所。  <user> – WS-Man 通信用アカウント。  <password> – WS-Man 通信用アカウントのパスワード。  <service name> – “OpsMgr Universal Connector” という形式でサービス名を入力します。 |

<オプション プロパティ>

|  |
| --- |
| <silent> – 入力されている場合は、コマンド出力は表示されません。  <test> – 入力されている場合は、scicert が接続を確認します。証明書のインストールは行われません。 |

注

Interop Provider 証明書は、3 年後に期限が切れるように構成されています。

高可用性用のインストール

Operations Manager 2007 R2 Connector の高可用性機能を使うと、データを損失することなくセカンダリ コネクタにフェールオーバーできます。この機能は、高可用性用に構成されたサーバー間で、サーバーまたは通信障害をサポートします。Operations Manager 2007 R2 ルート管理サーバー (RMS) や管理グループ全体の障害など、より重大な障害によるデータ損失は高可用性機能で復旧することはできません。

高可用性は、高可用性用に構成された各サーバーにコネクタをインストールすることで有効になります。インストールを高可用性用に指定するコネクタ インストール ウィザードの [コネクタ サービス ログインと高可用性の構成] ページには、[高可用性] チェック ボックスがあります。

高可用性グループのすべてのコネクタをインストールしたら、[<EMS> コネクタ構成] ダイアログ ボックスの [高可用性] タブを使って、これらのコネクタのフェールオーバー通信順序を構成します。[<EMS> コネクタ構成] の [高可用性] タブの使用に関する詳細については、こちら ([高可用性の構成](#z7a75fad22da34a6b9f01ad5d9db35410)) を参照してください。

重要

高可用性機能用にコネクタをインストールする場合は、次の点が順守されていることを確認します。

高可用性グループのすべてのコネクタ サービスのインストールに対して、[コネクタ サービス ログインと高可用性の構成] ページの [高可用性] チェック ボックスがオンになっている。

高可用性グループのすべてのコネクタインストールについて、同じ SQL コネクタ データベースとデータベース サーバーを使用している。

すべての高可用性インストールに [コネクタ サービス] インストールが必要ですが、[構成 UI] コンポーネントはオプションです。1 つの Operations Manager 2007 R2 管理グループ内で [構成 UI] コンポーネントのインストールを 1 つ以上行う必要があります。

高可用性コネクタにセカンダリ インストールを行った場合は、コネクタ 管理グループにあるそのコネクタの構成は別のインストールが行われるたびに上書きされます。このため、最後のインストールで設定された構成のみが適用されます。すべてのセカンダリ コネクタがインストールされるまでは、コネクタ オペレーション コンソールの [管理] ウィンドウから [<EMS> コネクタ構成] ダイアログ ボックスを使用して、コネクタ構成をカスタマイズしないでください。

重要

コネクタ サービスをインストールして起動した後に Interop Provider をインストールすると、コネクタ サービスから送信された構成値は Interop Provider インストールによって上書きされます。たとえば、[Universal Connector 構成] ダイアログ ボックスで設定された [プロバイダーのファイル形式] の値は、Interop Provider インストールの既定値 “.evt” に設定されます。コネクタ サービスをインストールした後で Interop Provider をインストールする場合、Interop Provider インストール後にコネクタ サービスを停止し、再起動します。

[<EMS> コネクタ構成] ダイアログ ボックスの [高可用性] ページで、すべてのコネクタが高可用性に構成されていることが確認できます。最初のコネクタはアクティブ コネクタですが、その他のコネクタはすべてパッシブ/オフライン状態になっています。パッシブ コネクタは、アクティブ コネクタでエラーが発生した場合に備えてスタンバイ状態になっています。

注

すべての高可用性コネクタがオフになっていると、Operations Manager 2007 R2 が一覧を更新するまで、アクティブ コネクタがダイアログ ボックスに引き続き表示されます。更新に必要な時間は、[ポーリング間隔 (秒)] フィールドと [許容範囲] フィールド内の値により決まります。たとえば、間隔が 30 秒で許容範囲が 3 であれば、更新時間は 90 秒になります。

コネクタの構成

このセクションでは、Microsoft System Center Operations Manager 2007 R2 Connectors を Operations Manager 2007 R2 環境にインストールした後で構成する方法について説明します。コネクタ インストール中、インストール ウィザードの [Connector 構成] ページで既定の コネクタ 構成ができます。[<EMS> コネクタ構成] ダイアログ ボックスを使うと、コネクタ のカスタム構成ができます。

重要

「付録」では、それぞれのサポートされているリモート システムの Operations Manager 2007 R2 Connector に特有の情報を提供します。これには、特定のリモート システムで行う追加構成手順に関する情報、コネクタ コンポーネントのインストール中に行うリモート システム構成に関する情報が含まれます。

[>EMS< コネクタ構成] ダイアログ ボックスを使用する

インストールされた各 コネクタ 専用の [<EMS> コネクタ構成] ダイアログ ボックスを使用して、通信と、リモート システム イベント情報へのアラートのマッピングを構成します。このダイアログ ボックスは Operations Manager 2007 R2 コンソールから利用可能で、以下のタブがあります。

注

汎用の Universal Connector には、[Universal Connector 構成] ダイアログ ボックスに [重要度マッピング] タブと [解決状態マッピング] タブがありません。[Universal Connector 構成] ダイアログ ボックスのタブは、それ以外の点では、[Connector 構成] ダイアログ ボックスと同じです。ただし、HP Operations Manager [Connector 構成] ダイアログ ボックスには、[アラート フィールド] タブの代わりに [プロパティ マッピング] タブがあります。

[<EMS> サーバー]

|  |
| --- |
| このタブを使って、コネクタ と通信するリモート システム サーバーを構成することができます。[<EMS> サーバー] タブの使用に関する詳細については、「[通信用にサーバーを構成する](#zec872081ca8c4b9aa388271019724fa8)」を参照してください。 |

Operations Manager

|  |
| --- |
| このタブを使って、Operations Manager 2007 R2 と通信する コネクタ サーバーを構成することができます。[Operations Manager] タブの使用に関する詳細については、「[通信用にサーバーを構成する](#zec872081ca8c4b9aa388271019724fa8)」を参照してください。 |

[アラート フィールド] または [プロパティ マッピング] (HP Operations Manager のみ)

|  |
| --- |
| このタブを使って、リモート システムへアラートと共に転送する追加の Operations Manager アラート フィールドを選択できます。HP Operations Manager の場合はこのタブの代わりに、Operations Manager 2007 R2 アラート プロパティを HP Operations Manager のイベント プロパティにマップする時に使用する [プロパティ マッピング] タブがあります。このタブの使用に関する詳細については、「[通信用にサーバーを構成する](#zec872081ca8c4b9aa388271019724fa8)」を参照してください。 |

[重要度マッピング]

|  |
| --- |
| このタブを使って、リモート システムの重要度レベルに Operations Manager の重要度レベルをマッピングできます。[重要度マッピング] の使用に関する詳細については、「[Operations Manager 2007 R2 アラートを転送用に構成する](#z67edec75e32a43989aeb6151104a7426)」を参照してください。 |

[解決状態マッピング]

|  |
| --- |
| このタブを使って、リモート システムの解決状態レベルに Operations Manager の解決状態レベルをマップできます。[解決状態マッピング] の使用に関する詳細については、「[Operations Manager 2007 R2 アラートを転送用に構成する](#z67edec75e32a43989aeb6151104a7426)」を参照してください。 |

[高可用性]

|  |
| --- |
| このタブを使って、ローカルの コネクタ の高可用性機能を構成することができます。高可用性 コネクタ を持つ各サーバーには、個別の コネクタ インストールが必要です。[高可用性] の使用に関する詳細については、「[高可用性の構成](#z7a75fad22da34a6b9f01ad5d9db35410)」を参照してください。 |

[Connector 構成] ダイアログ ボックスを開くには

|  |
| --- |
| 1. Operations Manager 2007 R2 コンソールの [管理] ナビゲーション ウィンドウで、[製品コネクタ] ノードを探します。[Interop Connectors] オブジェクトは、[製品コネクタ] ノードの下にあります。[Interop Connectors] の下で、構成する コネクタ をクリックします。  2. [結果] ウィンドウで、構成する コネクタ を右クリックしてから、[プロパティ] をクリックして、その コネクタ の [<EMS> コネクタ構成] ダイアログ ボックスを表示します。 |

通信用にサーバーを構成する

[<EMS> Connector 構成] ダイアログ ボックスを使って、Operations Manager 2007 R2 およびリモート システム サーバーの コネクタ との通信を構成することができます。[<EMS> Connector 構成] ダイアログ ボックスには、コネクタ 環境サーバーを構成する以下のタブがあります。

 [<EMS> サーバー] (<EMS> は特定リモート システム名のプレースホルダー)

 Operations Manager

[<EMS> サーバー構成]

[<EMS> コネクタ構成] ダイアログ ボックスの [<EMS> サーバー>] タブを使って、リモート システム サーバーの コネクタ との通信を構成することができます。

[<EMS> サーバー] タブには、以下のセクションと要素が含まれます。

[エンタープライズ管理システム (EMS) サーバー通信順序]

[上へ移動]

|  |
| --- |
| 選択したサーバー名を一覧の上へ移動します。 |

[下へ移動]

|  |
| --- |
| 選択したサーバー名を一覧の下へ移動します。 |

[リモート サーバー]

|  |
| --- |
| 選択したサーバーを一覧から削除します。 |

[サーバーの追加]

|  |
| --- |
| Interop Provider がインストールされているリモート システム サーバーを一覧に追加します。ポーリングおよびその他の コネクタ 通信は、一覧の一番上のサーバーで最初に試行されます。通信試行は一覧の下へ続行され、タブの下部セクションのサーバー設定に従って一覧をループします。サーバー名は、その他のソースから派生したものである必要があります。 |

注意

この一覧の各リモート システム サーバーには Interop Provider がインストールされている必要があります。そうでないと、通信試行は失敗します。

注意

名前にlocalhost は使用できません。ホスト名を正確に入力してください。

タブの次のセクションでの設定は選択したサーバーに適用、または表示されます。

[Web Services for Management (WS-Man) サーバー資格情報]

[ユーザー名]

|  |
| --- |
| Windows オペレーティング システムの場合、ユーザーは追加するサーバーのリモート システム環境のローカル管理者である必要があります。UNIX または Linux の場合、アカウントはリモートシステム環境に対する十分な権限がある任意のアカウントです。 |

[パスワード]

|  |
| --- |
| 追加するリモート システム サーバーの Web サービスの指定ユーザーのパスワードを入力します。  重要  ユーザー名とパスワードは、標準 ASCII 文字の範囲 (32-127) 内である必要があります。 |

[WS-Man ポート]

|  |
| --- |
| TCP ポート 1270 が既定で設定されており、変更できません。 |

[WS-Man の検証]

|  |
| --- |
| [WS-Man の検証] をクリックして、EMS サーバーとの通信を確認します。  コネクタ サービスとオペレーション コントロールは同じサーバーに存在している必要があります。また、EMS Provider の証明書は最新である必要があります。コネクタ サービスが別のサーバー上に存在する場合、またはEMS を変更してから新しい証明書をインポートしていない場合は、[WS-Man の検証] で接続を検証することができません。  注  一覧の一番上にある EMS サーバーのみが検証されます。他のサーバーを選択しても、検証には影響がありません。 |

次の [<EMS> サーバー] タブのセクションには、各 コネクタ に固有の要素のセットがあります。

OVO サーバー

[ポーリング間隔 (秒)]

|  |
| --- |
| 確認または更新されたイベント用に Interop Provider がリモート システム サーバーに行うポーリングの時間間隔を定める値を秒で設定します。既定 = 30 |

[Operations Manager から更新を受信する]

|  |
| --- |
| このチェック ボックスをオンにして、更新された Operations Manager 2007 R2 アラートを HP Operations Manager に転送できるようにします。 |

[更新を Operations Manager に送信する]

|  |
| --- |
| このチェック ボックスをオンにして、更新されたリモート システム イベントを Operations Manager 2007 R2 に転送できるようにします。 |

[ホスト名を IP アドレスに変換する]

|  |
| --- |
| このチェック ボックスをオンにして、一覧に入力したホスト名を IP アドレスへ自動変換します。 |

[TEC サーバー設定]

[ポーリング間隔 (秒)]

|  |
| --- |
| 確認または更新されたイベント用に Interop Provider がリモート システム サーバーに行うポーリングの時間間隔を定める値を秒で設定します。既定 = 30 |

[サーバー リスニング ポート]

|  |
| --- |
| UNIX プラットフォームで TEC 用ポート マッパーを使用する場合は 0 を設定します。それ以外の場合は、TEC 管理者の指示に従って設定します。Windows オペレーティング システムの TEC の場合は、通常 5529 です。既定 = 0 |

[Operations Manager から更新を受信する]

|  |
| --- |
| このチェック ボックスをオンにて、更新された Operations Manager 2007 R2 アラートを IBM Tivoli Console に転送できるようにします。 |

[更新を Operations Manager に送信する]

|  |
| --- |
| このチェック ボックスをオンにして、更新されたリモート システム イベントを Operations Manager 2007 R2 に転送できるようにします。 |

[Universal Connector のある EMS サーバー]

[ポーリング間隔 (秒)]

|  |
| --- |
| 確認または更新されたイベント用に Interop Provider がリモート システム サーバーに行うポーリングの時間間隔を定める値を秒で設定します。既定 = 30 |

[プロバイダーのファイル形式]

|  |
| --- |
| ドロップダウンの XML の値を選択して、XML ファイルとしてアラートを転送するように指定します。EVT を選択して、テキスト プロパティ ファイルとしてアラートを転送します。既定 = XML  注  Windows リモート システムで Interop Provider に転送されたアラートには XML 形式の検証、UNIX リモートシステムで Interop Provider に転送されたアラートには EVT テキスト形式の検証が行われます。Universal Connector アラート メッセージ形式の詳細については、「[Universal Connector の使用](#z3be1ec3e24204bf898c54061bc95dd9b)」を参照してください。 |

[Operations Manager から更新を受信する]

|  |
| --- |
| このチェック ボックスをオンにして、更新された Operations Manager 2007 R2 アラートをアクティブなリモート システムに転送できるようにします。 |

[更新を Operations Manager に送信する]

|  |
| --- |
| このチェック ボックスをオンにして、更新されたリモート システム イベントを Operations Manager 2007 R2 に転送できるようにします。 |

Remedy の設定

[ユーザー名]

|  |
| --- |
| これは、「[付録 A - BMC Remedy ARS Connector](#z91c6db10101f43a69fa7993de19929c4)」で opsmgr として指定した Remedy ユーザーです。 |

[パスワード]

|  |
| --- |
| ユーザーのパスワードを入力します。  重要  ユーザー名とパスワードは、標準 ASCII 文字の範囲 (32-127) 内である必要があります。 |

[認証]

|  |
| --- |
| 資格情報の認証システムが Remedy ARS に対して有効にされている場合、認証用に適切な文字列を入力します。 |

[ホスト名]

|  |
| --- |
| このフィールドには、BMC Remedy ARS がインストールされたコンピューターのサーバー名が入力されます。 |

Remedy サーバーの設定

[ポーリング間隔 (秒)]

|  |
| --- |
| 確認または更新されたイベント用に Interop Provider がリモート システム サーバーに行うポーリングの時間間隔を定める値を秒で設定します。既定 = 30 |

[Operations Manager から更新を受信する]

|  |
| --- |
| このチェック ボックスをオンにて、更新された Operations Manager 2007 R2 アラートを IBM Tivoli Console に転送できるようにします。 |

[更新を Operations Manager に送信する]

|  |
| --- |
| このチェック ボックスをオンにして、更新されたリモート システム イベントを Operations Manager 2007 R2 に転送できるようにします。 |

[Operations Manager サーバー構成]

[Connector 構成] ダイアログ ボックスの [Operations Manager] タブを使って、Operations Manager 2007 R2 ルート管理サーバー (RMS) の コネクタ との通信を構成することができます。1 つの Operations Manager 2007 R2 管理グループには 1 つの RMS のみ設定できるため、一覧に追加することのできるその他の コネクタ RMS はありません。Operations Manager 2007 R2 管理グループが新しい RMS で再構成された場合、この一覧を使って通信を再構成します。

注意

異なる管理グループの Operations Manager 2007 R2 RMS を一覧表示すると、異なる Operations Manager 2007 R2 データベースからのアラートの転送が発生します。

[Operations Manager ] タブには、以下のセクションと要素が含まれます。

[Operations Manager サーバー通信順序]

[上へ移動]

|  |
| --- |
| 選択したサーバー名を一覧の上へ移動します。 |

[下へ移動]

|  |
| --- |
| 選択したサーバー名を一覧の下へ移動します。 |

[リモート サーバー]

|  |
| --- |
| 選択したサーバーを一覧から削除します。 |

[サーバーの追加]

|  |
| --- |
| コネクタと通信する Operations Manager 2007 R2 サーバーを追加します。ポーリングおよびその他の コネクタ 通信は、一覧の一番上のサーバーで最初に試行されます。通信試行は一覧の下へ続行され、この [Operations Manager] タブの下部セクションのサーバー設定に従って一覧をループします。サーバー名は、その他のソースから派生したものである必要があります。  注意  名前にlocalhostは使用できません。ホスト名を正確に入力するか、IP アドレスを使用してください。リモート システムのサーバーと通信できるのは、Operations Manager 2007 R2 ルート管理サーバー (RMS) のみです。 |

タブの次のセクションでの設定は選択したサーバーに適用、または表示されます。

Operations Manager サーバー設定

[ポーリング間隔 (秒)]

|  |
| --- |
| 新規または更新された Operations Manager 2007 R2 アラートのポーリング間隔の秒数を設定します。既定 = 30 |

[履歴アラートの転送 (経過時間)]

|  |
| --- |
| 何時間遡ってリモート システムに送信するアラートを探すかを設定します。既定= 0 (コネクタ サービスの起動時、または再起動時に履歴アラートが送信されないことを示します)  注意  コネクタ サービスをオフにして履歴アラートの転送の設定が 0 のときにオンに戻すと、サービスがアクティブでない間に発生したすべてのアラートはリモート システムに転送されません。 |

[最大フィールド サイズ]

|  |
| --- |
| 各フィールドについてデータとして送信可能な最大文字数を設定します。既定 = 2000 |

[最大配布回数]

|  |
| --- |
| 転送に失敗した場合に Operations Manager 2007 R2 アラート送信を試みる回数を設定します。既定 = 5 (無限の場合は 0 に設定します。) |

[応答を待つ間のポーリング回数]

|  |
| --- |
| キャッシュにアラートを保持するポーリング回数を設定します。[サーバー ポーリング間隔] と [応答を待つ間のポーリング回数] を掛けて、キャッシュ保持の合計期間を算出します。たとえば、既定設定ではキャッシュにアラートを 5 分間保持します。 既定 = 10 |

[解決済みアラートにのみ更新内容を送信します]

|  |
| --- |
| このチェック ボックスをオンにして、Operations Manager 2007 R2 アラート状態が [終了済み] に設定された場合のみリモート システム サーバーにアラート更新を転送します。 |

Operations Manager 2007 R2 アラートを転送用に構成する

[<EMS> Connector 構成] ダイアログ ボックスを使って、Operations Manager 2007 R2 アラートのプロパティをマップして、その他のリモート システムのイベントと同期することができます。[<EMS> Connector 構成] ダイアログ ボックスには、アラートを転送用に構成する以下のタブがあります。

 アラート フィールド

IBM Tivoli Enterprise Console Connector

BMC Remedy ARS Connector

Universal Connector

 プロパティ マッピング

HP Operations Manager

 [重要度マッピング]

HP Operations Manager

IBM Tivoli Enterprise Console Connector

BMC Remedy ARS Connector

 [解決状態マッピング]

HP Operations Manager

IBM Tivoli Enterprise Console Connector

BMC Remedy ARS Connector

アラート転送用のアラート フィールドを設定する

[<EMS> Connector 構成] ダイアログ ボックスの [アラート フィールド] タブを使用して、リモート システムに送信するアラートに含める Operations Manager 2007 R2 アラート フィールドを選択することができます。

[アラート フィールド] タブには、機能別にグループ化されたアラート フィールド用のチェック ボックスがある次のセクションがあります。

アラート

|  |
| --- |
| Category  [コンテキスト]  [説明] — 既定  [更新者] — 既定  [更新時刻] — 既定  [所有者] — 既定 |

カスタム フィールド

|  |
| --- |
| [カスタム フィールド 1] — 既定  [カスタム フィールド 2] — 既定  [カスタム フィールド 3] — 既定  [カスタム フィールド 4] — 既定  [カスタム フィールド 5] — 既定  カスタム フィールド 6  カスタム フィールド 7  カスタム フィールド 8  カスタム フィールド 9  カスタム フィールド 10 |

[コネクタ]

|  |
| --- |
| [コネクタの状態]  [コネクタ ID] |

監視オブジェクト

|  |
| --- |
| [監視オブジェクトの表示名]  [監視オブジェクトのフルネーム]  [監視オブジェクト ID]  [メンテナンス モードの監視オブジェクト] — 既定  [監視オブジェクトのヘルス状態] — 既定  [監視オブジェクト名] — 既定  [監視オブジェクトのパス] — 既定  [管理サーバー名] — 既定 |

その他

|  |
| --- |
| [コンピューター名] — 既定  [ドメイン名] — 既定  [最終更新者 nonConnector]  [メンテナンス モード最終更新日時]  [監視クラス ID]  [監視ルール ID]  [プリンシパル名]  [解決者]  [サイト名]  [状態の最新更新日時]  [追加した日時]  [解決状態の更新日時]  解決した日時  [製品ナレッジ] |

重要

IBM Tivoli Enterprise Console (TEC) Connector で、[組織ナレッジ] フィールドか [コンテキスト] フィールドが選択されている場合は、[TEC Connector 構成] ダイアログ ボックスの Operations Manager ページで、[最大] フィールド サイズ設定を 1000 などの低めの数字に下げることをお勧めします。TEC ではイベントのサイズ制限があるため、このような設定が必要になります。この調整を行わない場合、転送されたアラートが TEC で正しく処理されない場合があります。

Operations Manager 2007 アラートから HP Operations Manager イベントへプロパティをマッピングする

[HP Operations Manager Connector 構成] ダイアログ ボックスの [プロパティ マッピング] タブを使用して、HP Operations Manager イベント プロパティに Operations Manager 2007 R2 アラート プロパティをマッピングすることができます。

[プロパティ マッピング] タブには、以下のセクションと要素が含まれます。

現在の OVO から Operations Manager へのプロパティ マッピング

[OVO イベント プロパティ]

|  |
| --- |
| この列には、構成された HP Operations Manager のイベント プロパティが表示されます。 |

[Operations Manager アラート プロパティ]

|  |
| --- |
| この列には、HP Operations Manager イベント プロパティにマッピングされた構成済みの Operations Manager 2007 R2 アラートが表示されます。 |

[マッピングの削除]

|  |
| --- |
| このボタンをクリックして、マッピング テーブルから選択したセットを削除します。 |

OVO のイベントを Operations Manager のアラート プロパティへマップ

[OVO イベント プロパティ]

|  |
| --- |
| この HP Operations Manager のイベント プロパティの一覧から選択します。 |

[Operations Manager アラート プロパティ]

|  |
| --- |
| この Operations Manager 2007 R2 アラート プロパティの一覧から選択して、選択した HP Operations Manager イベント プロパティにマッピングします。 |

[マッピングの追加]

|  |
| --- |
| このボタンをクリックして、現在選択されているマッピングをマッピング テーブルに追加します。 |

[オプションのテキスト メッセージ]

[OVO イベント プロパティ]

|  |
| --- |
| この列には、構成された HP Operations Manager のイベント プロパティが表示されます。 |

[オプションのテキスト メッセージ]

|  |
| --- |
| この列を使用して、HP Operations Manager イベント プロパティに関連付けられたオプションのテキスト メッセージを入力しマッピングします。 |

Operations Manager 2007 重要度レベルをリモート システムにマッピングする

[<EMS> Connector 構成] ダイアログ ボックスの [重要度マッピング] タブを使うと、Operations Manager 2007 R2 重要度レベルを同等のリモート システム設定にマッピングできます。

[重要度マッピング] タブには、以下のセクションと要素が含まれます。

現在の <EMS> から Operations Manager への重要度マッピング

[<EMS> 重要度]

|  |
| --- |
| この列には、構成したリモート システムの重要度が表示されます。 |

[Operations Manager 重要度]

|  |
| --- |
| この列には、リモート システム重要度にマッピングされた構成済みの Operations Manager 2007 R2 重要度が表示されます。 |

[マッピングの削除]

|  |
| --- |
| このボタンをクリックして、マッピング テーブルから選択したセットを削除します。 |

<EMS> を Operations Manager 重要度へマップ

[<EMS> 重要度]

|  |
| --- |
| このリモート システム重要度レベルの一覧から選択します。 |

[Operations Manager 重要度]

|  |
| --- |
| この Operations Manager 2007 R2 重要度レベルの一覧から選択して、選択したリモート システム重要度レベルにマッピングします。 |

[マッピングの追加]

|  |
| --- |
| このボタンをクリックして、現在選択されているマッピングをマッピング テーブルに追加します。 |

Operations Manager 2007 解決状態をリモート システムにマッピングする

[<EMS> Connector 構成] ダイアログ ボックスの [解決状態マッピング] タブを使うと、Operations Manager 2007 R2 解決状態を同等のリモート システム設定にマッピングできます。

[解決状態マッピング] タブには、以下のセクションと要素が含まれます。

現在の <EMS> から Operations Manager への解決状態マッピング

[<EMS> 解決状態]

|  |
| --- |
| この列には、構成したリモート システムの解決状態が表示されます。 |

[Operations Manager 解決状態]

|  |
| --- |
| この列には、リモート システム解決状態にマッピングされた構成済みの Operations Manager 2007 R2 解決状態が表示されます。 |

[マッピングの削除]

|  |
| --- |
| このボタンをクリックして、マッピング テーブルから選択したセットを削除します。 |

<EMS> を Operations Manager 解決状態へマップ

[<EMS> 解決状態]

|  |
| --- |
| このリモート システム解決状態の一覧から選択します。 |

[Operations Manager 解決状態]

|  |
| --- |
| この Operations Manager 2007 R2 解決状態の一覧から選択して、選択したリモート システム解決状態の値にマップします。 |

[マッピングの追加]

|  |
| --- |
| このボタンをクリックして、現在選択されているマッピングをマッピング テーブルに追加します。 |

注

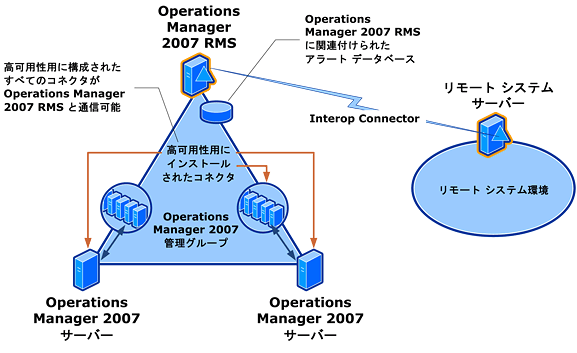
Remedy システムに関しては、アラートの resolutionstate を“割り当て済み”または“解決済み”以外の値に変更してから、アラートを転送する場合、TicketID が返されると resolutionstate が“割り当て済み”に変更されます。

高可用性の構成

[<EMS> Connector 構成] ダイアログ ボックスを使って、高可用性 Operations Manager 2007 R2 Connectors を構成したり、その可用性を監視することができます。

高可用性を構成するには、複数のサーバーにコネクタをインストールする必要があります。各高可用性コネクタは 高可用性機能とともにインストールされます。この機能は、コネクタ インストールの [コネクタ サービス ログインと高可用性の構成] で有効になります。すべての高可用性コネクタ インストールで同じ SQL データベースを使用し、1 つのコネクタ管理グループの環境内にインストールする必要があります。

高可用性サーバーの通信順序表における高可用性フェイルオーバーの考慮事項



高可用性の使用

[<EMS>コネクタ構成] ダイアログ ボックスの [高可用性] タブを使って、コネクタ サービスの高可用性通信を行うコネクタサーバーを構成することができます。

[高可用性] タブには、以下のセクションと要素が含まれます。

高可用性の構成

[ポーリング間隔 (秒)]

|  |
| --- |
| このボックスを使用して、値を秒で入力します。この値は、高可用性で構成したサーバーの可用性状態のポーリング間隔です。既定 = 30 |

許容範囲

|  |
| --- |
| このボックスを使用して、高可用性サーバーが指定した期間応答しないとオフラインと判断される、高可用性ポーリング間隔の値を入力します。たとえば、ポーリング信号に対して 90 秒間応答がないと、既定設定で高可用性サーバーをオフラインと判断します。既定 = 3 |

[高可用性サーバーの通信順序]

[ホスト名 (サーバー)]

|  |
| --- |
| サーバー一覧表の最初の列で、サーバー名を表示します。Operations Manager 2007 R2 管理グループ内で、指定されたリモート システムにコネクタがインストールされているすべてのサーバーが一覧に表示されます。 |

状態

|  |
| --- |
| サーバー一覧表の 2 番目の列で、最後のポーリング時の可用性状態を表示します。可能な状態は、次のとおりです。  アクティブ – 現在使用中のコネクタ。  パッシブ – 利用可能だが、現在は使用されていないコネクタ。  オフライン – 現在利用不可のコネクタ。  注  すべての高可用性コネクタがオフになっていると、Operations Manager 2007 R2 が一覧を更新するまで、アクティブ コネクタがダイアログ ボックスに引き続き表示されます。更新に必要な時間は、[ポーリング間隔 (秒)] フィールドと [許容範囲] フィールド内の値により決まります。たとえば、間隔が 30 秒で許容範囲が 3 であれば、更新時間は 90 秒になります。 |

[最終ハートビート]

|  |
| --- |
| サーバー一覧表の 3 番目の列で、最後に成功したポーリングのタイムスタンプを表示します。 |

[上へ移動]

|  |
| --- |
| サーバー一覧表に複数のサーバーが表示されている場合は、このボタンをクリックして、選択したサーバーを 1 つ上のスペースに移動します。 |

[下へ移動]

|  |
| --- |
| サーバー一覧表に複数のサーバーが表示されている場合は、このボタンをクリックして、選択したサーバーを 1 つ下のスペースに移動します。 |

[一覧を最新の情報に更新]

|  |
| --- |
| サーバー一覧表のすべての情報を最後のポーリングの状態に更新するには、このボタンをクリックします。 |

重要

構成の変更を行うたびに、すべての高可用性コネクタを再起動する必要があります。

Universal Connector の使用

Universal Connector は、Windows オペレーティング システムまたはサポートされた UNIX および Linux プラットフォーム上で展開可能なリモート システムへのコネクタ サービスを介して コネクタ アラートを配信するように設計されています。このセクションでは、リモート システム管理者や開発者が Universal Connector で コネクタ アラートの転送を可能にするために必要な通信情報とサンプルのアラート形式について説明します。

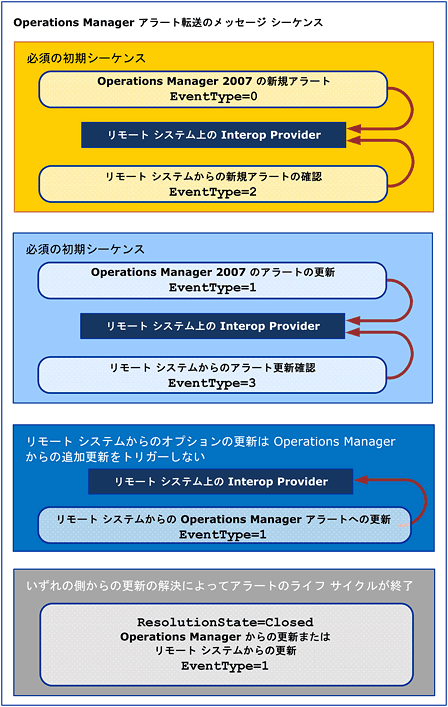
アラート通信ライフ サイクルと要件

Universal Connector をインストールし構成すると、サービスが実行され、Operations Manager 2007 R2 アラートを「[コネクタの構成](#z24001a98875849d78aa893b8454a56bf)」で説明される構成を使ってリモート システムに転送することができます。Operations Manager 2007 R2 アラートは手動で転送するか、「[コネクタ転送の制御](#zbc63f22c12334fd5b85f487aeadac826)」で説明される製品コネクタ配信登録で転送します。

リモート システム管理者または開発者は、Interop Provider がリモート システム サーバーに保存する Operations Manager 2007 R2 アラートおよびアラート更新ファイルから、リモート システムへデータを転送する統合論理を実装する必要があります。このプロセスには、アラートの確認および Operations Manager 2007 R2 からのアラート更新として、リモート システムから Interop Provider へのファイル提供が含まれることもあります。このプロセスでは、Operations Manager 2007 R2 アラートで派生したイベントに対してリモート システムが送信する更新について、リモート システムから Interop Provider へファイルを提供する必要もあります。この転送プロセスには、リモート システムで使用されるフィールドまたはプロパティの名前と値を Operations Manager 2007 R2 で使用されるものにに変換、あるいはマッピングすることも含まれます。 EventType フィールドはすべてのメッセージで必要で、メッセージが新規アラート、新規アラートの確認、アラート更新、アラート更新確認、またはリモート システム更新のいずれであるかを判断します。

必要な統合論理の PowerShell サンプルについては、「[付録 D - Universal Connector](#z8ca6cb7a963b447e89a018daecc97a6f)」を参照してください。

次の図に、Universal Connector を使って Operations Manager 2007 アラートをリモート システムに転送するための必須および任意の通信シーケンスを示します。



Operations Manager 2007 R2 からリモート システムに転送されるアラートとアラート更新には、[Universal Connector 構成] ダイアログ ボックスの [アラート フィールド] タブで指定されたフィールドが含まれます。次の表に、Operations Manager 2007 R2 から転送されるアラートと更新に含まれる必要なフィールドを示します。[アラート フィールド] タブですべての選択可能なフィールドをクリアすると、この表には、アラートおよびアラート更新で引き続き報告されるフィールドが表示されます。さらに、リモート システムからの確認と更新で Operations Manager 2007 R2 に返される必要のあるフィールドが示されます。

最小または必須アラート、更新、および確認フィールド

|  |  |
| --- | --- |
| メッセージの種類 | 最小または必須フィールド |
| 新しい Operations Manager アラート | AlertID  EventType=0  ManagementGroupName  優先度  ResolutionState  状態 |
| Operations Manager アラートからの更新 | AlertID  EventType=1  ManagementGroupName  優先度  ResolutionState  状態 |
| 新しいアラートのリモート システム確認 | AlertID  EventID  EventType=2  ManagementGroupName |
| アラート更新のリモート システム確認 | AlertID  EventID  EventType=3  ManagementGroupName |
| Operations Manager アラートのリモート システム更新 | AlertID  EventType=1  ManagementGroupName |

リモート システムからの確認メッセージで Operations Manager 2007 R2 データベースに書き込まれる唯一のフィールドは、EventID フィールドです。このフィールドの値が、該当するアラートの TicketID フィールドに書き込まれます。

リモート システムからの更新の以下のメッセージ フィールドは、Operations Manager 2007 R2 データベースに書き込まれます。

CustomField1-10

EventID

OwnerName

ResolutionState

次に、Universal Connector メッセージが配信および返信される Interop Provider インストール フォルダーに相対するフォルダーまたはディレクトリを示します。これらのパスは、Windows オペレーティング システムでも UNIX プラットフォームでも同一です。リモート システムが返すファイル名は、Windows オペレーティング システムでは <ファイル名>.xml、UNIX および Linux プラットフォームでは <ファイル名>.evt である必要があります。

Interop Provider が Operations Manager 2007 Universal Connector から受信するメッセージのパス:

%ProviderInstallDirectory%\UnvEvents\FromOpsMgr

Interop Provider が リモート システムから受信するメッセージのパス:

%ProviderInstallDirectory%\UnvEvents\%ManagementGroup%

アラート メッセージ形式

次に、リモート システムで コネクタ サービスから Interop Provider に転送される単純なアラート メッセージのサンプルを示します。アラートは Windows オペレーティング システムでは XML 形式 (\*.xml) で、UNIX および Linux プラットフォームではテキスト ファイル (\*.evt) でプロパティとして送信する必要があります。それぞれの種類のプラットフォームで、確認または更新のメッセージは、Interop Provider へ転送したものと同じ形式で Interop Provider から Operations Manager 2007 R2 へ返されることが必要です。

注

アラート メッセージの形式は、[Universal Connector 構成] ダイアログ ボックスで XML または EVT として構成されます。XML は Windows オペレーティング システムの既定値で、EVT は UNIX プラットフォームの既定値です。

XML 形式

次に、Windows オペレーティング システム上で XML 形式でリモート システムに転送されるサンプルの Operations Manager 2007 R2 アラートを示します。

<?xml version="1.0" standalone="yes"?>

<UNVEvent> <AlertId>4be9ec63-c23b-4aa0-806a-0e91d84cd33f</AlertId> <Category>Custom</Category> <ComputerDomain>YourCorpDomain</ComputerDomain> <ConnectorId>fae610c9-9403-4b5e-b5d6-a81575b35f1f</ConnectorId> <ConnectorStatus>Pending</ConnectorStatus> <Description>evt created by Microsoft</Description> <EventId>102</EventId> <EventType>1</EventType> <LastModifiedByNonConnector>11/7/2008 10:00:01 PM</LastModifiedByNonConnector> <MaintenanceModeLastModified>1/1/1900 12:00:00 AM</MaintenanceModeLastModified> <ManagementGroupName>YourCorpMgGrp</ManagementGroupName> <ModifiedBy>YourCorpDomain\admin</ModifiedBy> <MonitoringObjectId>39e8d0dc-45d2-3dc3-ace0-1731b3078218</MonitoringObjectId> <MonitoringObjectPath>YourCorpMgGrp.YourCorpDomain.com</MonitoringObjectPath> <MonitoringRuleId>894b1b8d-2162-62f3-a286-abd7cdcb2582</MonitoringRuleId> <Priority>Normal</Priority> <ProblemId>2811d1fd-1299-4f37-9c47-9b23ffa9fb1f</ProblemId> <ResolutionState>New</ResolutionState> <Severity>Error</Severity> <StateLastModified>10/30/2008 5:00:01 PM</StateLastModified> <TimeAdded>11/6/2008 7:55:23 PM</TimeAdded> <TimeOfLastEvent>11/7/2008 10:00:01 PM</TimeOfLastEvent> <TimeResolutionStateLastModified>11/6/2008 7:59:59 AM</TimeResolutionStateLastModified> </UNVEvent>

プロパティのテキスト ファイル形式

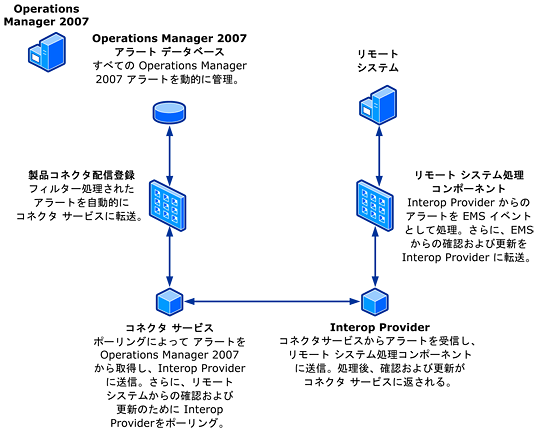
次に、UNIX または Linux プラットフォーム上でテキスト形式のプロパティとしてリモート システムに転送されるサンプルの Operations Manager 2007 R2 アラートを示します。

AlertId=1b11d523-1b91-40e3-a318-43d810d7951f Category=Custom ComputerDomain=YourCorpDomain ConnectorId=fae610c9-9403-4b5e-b5d6-a81575b35f1f ConnectorStatus=Pending Description=evt created by Microsoft EventId=102 EventType=1 LastModifiedByNonConnector=11/7/2008 10:00:01 PM MaintenanceModeLastModified=1/1/1900 12:00:00 AM ManagementGroupName=YourCorpMgGrp ModifiedBy=YourCorpDomain \admin MonitoringObjectId=39e8d0dc-45d2-3dc3-ace0-1731b3078218 MonitoringObjectPath=OpsMgr01.YourCorpDomain.com MonitoringRuleId=894b1b8d-2162-62f3-a286-abd7cdcb2582 Priority=Normal ProblemId=d2ff0b6b-c27e-477f-bb05-a3d2988387af ResolutionState=New Severity=Error StateLastModified=10/30/2008 5:00:01 PM TimeAdded=11/6/2008 7:55:23 AM TimeOfLastEvent=11/7/2008 10:00:01 PM TimeResolutionStateLastModified=11/6/2008 7:59:59 AM

コネクタ転送の制御

ここでは、Microsoft System Center Operations Manager 2007 R2 Connectors の送信および受信活動の制御などについて説明します。

Interop Connectors 環境内の通信フロー



次の手順では、個々のアラートまたは Operations Manager 2007 R2 のアラートのグループを手動で転送する方法を説明します。Operations Manager 2007 R2 製品コネクタ 配信登録を使用して、Operations Manager 2007 R2 アラートの自動転送を構成します。

Operations Manager 2007 アラートを手動で転送する方法

|  |
| --- |
| 1. Operations Manager 2007 R2 オペレーション コンソールの [結果] ウィンドウのアラートを右クリックして [転送先] をクリックし、使用する特定のコネクタをクリックします。  注  複数の項目を選択する際の通常の方法を使用して、転送用の複数のアラートを選択できます。連続する選択には Shift キーを使用し、連続しない選択には Ctrl キーを使用します。  2. 転送中のアラートの転送状態は一時的に"転送の保留中" と表示されてから"転送の成功" に変わります。. Operations Manager 2007 R2 では、転送が成功するとリモート システム イベント ID が Operations Manager 2007 R2 TicketID フィールドに格納されます。 |

Operations Manager 2007 R2 製品コネクタ配信登録ウィザードを使用する

[製品コネクタのプロパティ] ダイアログ ボックスを使って、製品コネクタ配信登録ウィザードにアクセスします。このダイアログ ボックスは Operations Manager 2007 R2 コンソールから利用可能です。製品コネクタ配信登録ウィザードを使用すると、Operations Manager 2007 R2 アラートを自動転送できます。ウィザードでは、指定したリモート システム用に特定のコネクタに送信するアラートを選択することもできます。

重要

複数のコネクタをインストールして、単一の Operations Manager 2007 R2 管理グループで自動転送する場合は、配信登録フィルター処理を活用することが必要です。そのような場合に適切なフィルター処理を構成しないと、アラート転送データの整合性は保証されません。配信登録は重複しないようにします。

別のリモート システムにアラートが Operations Manager 2007 R2 Connector で転送されると、そのリモー トシステムで既知のイベント ID を含む確認がリモート システムから返されます。ID は、Operations Manager 2007 R2 アラート データベースのそのアラートの TicketID フィールドに格納されます。こうして、個々のアラートが 1 つ以上のリモート システムに転送されると、そのアラートのデータが破損したり、信頼性がなくなる可能性があります。

複数のコネクタ環境で特定のコネクタの配信登録を定義する場合は、特に製品コネクタ配信登録ウィザードの [グループ] と [ターゲット] ページのいずれか、または両方を使用して、各コネクタで転送するアラートを分類するようにします。

[製品コネクタのプロパティ] ダイアログ ボックスを開き、製品コネクタ配信登録ウィザードにアクセスするには

|  |
| --- |
| 1. Operations Manager 2007 R2 管理グループの Operations Manager 管理者ロールのメンバーであるアカウントを使用してコンピューターにログオンします。  2. Operations Manager 2007 R2 オペレーション コンソールのナビゲーション ウィンドウで [管理] をクリックします。  3. [製品コネクタ] ノード下の [管理] ナビゲーション ウィンドウで、[内部コネクタ] をクリックします。  4. 実行中のインストールされたすべてのコネクタ サービスが、[内部コネクタ] ウィンドウに表示されます。配信登録を設定するコネクタをダブルクリックするか、コネクタを右クリックして、[プロパティ] をクリックします。  5. [製品コネクタのプロパティ] ダイアログ ボックスが表示されます。[配信登録] セクションで、[追加] ボタンをクリックし、製品コネクタ配信登録ウィザードを起動します。  重要  製品コネクタ配信登録ウィザードで配信登録を構成する場合、[終了済み] アラートは転送しないようにお勧めします。終了済みアラートを転送すると、予想外の量のアラートが転送される場合があります。製品コネクタ配信登録ウィザードの [条件] ページで、既定で [終了済み] チェック ボックスがオンになっていることがありますので、[終了済み] をクリアするようにしてください。 |

製品コネクタ配信登録ウィザードを使用するには

|  |
| --- |
| 1. 製品コネクタ配信登録ウィザードを起動したら、[全般] ページで、作成している配信登録の名前と簡単な説明を入力し、[次へ] をクリックします。  2. [グループ] ページでは、このコネクタでリモート システムに転送するアラートをグループ別にフィルター処理します。既定では、すべてのチェック ボックスがオンになっているので、すべてのグループからのアラートが転送されます。子チェック ボックスをオンにするには、最上位のチェック ボックスをオフにします。選択が完了したら、[次へ] をクリックします。  3. [ターゲット] ページでは、このコネクタで転送するアラートをオブジェクトの種類に基づいてフィルター処理します。既定では、すべての管理パックのすべてのオブジェクトの種類からのアラートが受け入れられます。アラートの転送元となる特定の管理パックまたは特定の監視オブジェクトを指定できます。指定したオブジェクトの種類からのアラートのみを受け入れるには、[ターゲットが [承認されたターゲット] グリッドに明示的に追加されたアラートのみを転送する] をクリックします。[追加] をクリックして、個別のターゲットを選択してから、[次へ] をクリックします。  4. [条件] ページでは、このコネクタで転送するアラートを、アラートの重要度、優先順位、解決状態、カテゴリに基づいてフィルター処理します。既定では、重要度 [エラー]、優先順位 [高] と [中]、および解決状態 [新規] と [終了済み] のチェック ボックスがオンになっています。既定では、すべてのカテゴリのチェック ボックスがオンになっています。ただし、これらの要因のすべてを個別に構成して、転送するアラートの条件を決定することができます。  選択が完了したら、[作成] をクリックしてコネクタ配信登録を作成します。作成されると、直ちに配信登録されたアラートの Operations Manager 2007 R2 転送キューへの転送が開始します。そこからコネクタ サービスがリモート システムにアラートを送信します。配信登録は、[製品コネクタ] ウィンドウの [配信登録] 画面が最新の情報に更新されると表示されます。配信登録をダブルクリックして、編集します。 |

コネクタ サービスの停止または開始

コネクタ サービスは、インストールされると自動的に起動します。コネクタ サービスを停止したり、開始するには、コネクタ サービスがインストールされた サーバーの [サービス] 画面を使用します。

リモート システム環境で Windows にインストールされている Interop Provider は、Windows Management Instrumentation (WMI) 内で実行されます。WMI は自動的に Interop Provider の動作を管理します。UNIX システムでは、インストールが完了すると、Interop Provider デーモンが自動的に起動します。

コネクタ サービスを開始または停止するには

|  |
| --- |
| 1. [コントロール パネル] ウィンドウを開き、[管理ツール] を開き、[サービス] を選択します。  2. [サービス] 一覧で、管理する Operations Manager 2007 R2 コネクタを右クリックして、[開始] または [停止] をクリックします。  3. HP Operations Manager の場合、2 番目のサービスである System Center OpsMgr Event Consumer for HP OpenView が Windows にインストールされてあり、[サービス] 一覧で開始または停止できるようになっています。 |

UNIX で Interop Provider を開始または停止するには

|  |  |
| --- | --- |
| 1. cimserver デーモンは、コマンド ラインから Scxadmin.exe を実行することで、AIX、Solaris、HP-UX で開始したり停止することができます。ファイル Scxadmin.exe は、Interop Provider を実行中のサーバーの Interop Provider インストール ディレクトリにあります。  scxadmin <必須プロパティ>  <必須プロパティ>   |  | | --- | | ACTION=”<アクション>” – 要求されるデーモン状態を指定する列挙型。有効な値は、“-start”、“-stop”、“-restart”、“-status” です。  DAEMON=”<デーモン>” – 影響を受けるデーモンを指定する列挙型。有効な値は、“all”、“cimom”、“provider” です。 |   2. scinteropd デーモンは、HP Operations Manager のovstart の一部です。 ovstartまたは ovstopで開始または終了します。たとえば、次のようになります。  ovstart scinteropd  ovstop scinteropd |

付録 A - BMC Remedy ARS Connector

BMC Remedy AR サーバーを構成する

Remedy AR 用に Operations Manager 2007 R2 Connector の Interop Provider をインストールする前に、Remedy ARS 管理者は Remedy ARS サーバーで次のことを実行する必要があります。

カスタマイズ

|  |
| --- |
|  Remedy Help Desk または Incident Management などのアプリケーションをカスタマイズした場合、または Remedy v6.3 に修正プログラムを適用した場合は、Operations Manager 2007 R2 アラートと修正プログラムを受け入れて処理できるように、このコネクタの実装時にカスタマイズを行わなければならない場合があります。インシデントで必須フィールドの確認または設定を行う方法を変更した場合は、この可能性が高くなります。   状態、優先度、インパクト、緊急度などのフィールドで使用されている値を変更する場合、コネクタ側の値がユーザー側の値と一致するよう、コネクタ コードである程度の再マッピングを行う必要があります。コネクタがインシデントのフィールドを設定する時にエラーが発生しないようにするには、この再マッピングが必要になります。このようなシナリオになった場合は、Microsoft に連絡してください。   状態フィールドの値を変更する場合、または 解決 や 保留理由の値を変更する場合はインストール後に、ユーザー側の値に合わせて状態移行マッピング フォームのフィールドの値やデータを変更する必要があります。 |

Remedy の構成

|  |
| --- |
|  AR システム ポートマッパーが有効になっていない場合は、ARTCPPORT 環境変数を AR TCP ポートの値に設定して、Interop Provider が Remedy AR システムと通信できるようにする必要があります。たとえば、以下のようなものがあります。  set ARTCPPORT = your-AR-TCP-port-value |

バージョン管理

|  |
| --- |
|  Remedy RMS Connector は次の製品バージョンを基に開発・テストが行われました。   V6.3:Help Desk v6.0 (修正プログラム適用なし)。プラットフォームは Remedy v6.3 (修正プログラム適用なし)。   V7.1:Incident Management 7.0.3 patch 7。プラットフォームは Remedy v7.1 patch 6。 |

Remedy AR Server v6.3 をインストールする

Operations Manager ユーザーを次のように作成します。

アプリケーション構成の権限が付いているアカウントで、BMC Remedy User アプリケーションを開きます。

新しいウィンドウで、SHR:People フォーム (別名、人物情報) を開きます。

すべてのフィールドを既定値に設定し、次の情報を入力します。

 ログイン名 = opsmgr

 姓 = Manager

 名 = Operations

 サポート スタッフ?= はい

 種類 = 外部

 状態 = ビジー

 AR ライセンスの種類 = 固定

 アプリケーション ライセンスの種類 = = HelpDesk-固定

 グループ一覧 = APP-サポート、管理者

重要

opsmgr ログイン名は、Remedy の Administrators グループのメンバのものである必要があります。

Operations Manager アラート チケット分類の作成:

SHR:Categorization フォームを新規モードで開き、次の値を入力します。

 カテゴリ = “監視”

 種類 = “OpsMgr”

 項目= “アラート”

Remedy ARS 用の Operations Manager 2007 R2 Connectors インターフェイス フォームおよびフィルター

Remedy AR 環境に Interop Provider コンポーネントをインストールする間、Operations Manager 2007 R2 インターフェイス フォームに加え、その他のフォームおよびフィルターを含むファイルが指定 Remedy ARS サーバーにコピーされます。これらの Remedy ARS フォームとフィルターをインポートして、Remedy ARS チケットへの Operations Manager 2007 R2 アラートのフローを有効にします。

このようなフォームとフィルターを含む .xml ファイルは、Interop Provider インストール フォルダーにコピーされます。Remedy ARS 6.3 のファイルは次のディレクトリに入っています。

C:\Program Files\System Center Operations Manager 2007 Providers\Operations Manager 2007 Connector to BMC Remedy AR System 6.3 Provider\

コネクタ インターフェイスのフォームとフィルターをインポートするには

|  |
| --- |
| 1. 管理者権限が付いているアカウントで、Remedy Administrator にログインします。  2. 既存の Operations Manager コネクタ フォームまたはフィルターが削除されていることを確認します。[Remedy 管理者 – サーバー ウィンドウ] で、ツリー表示に移動し、[フォーム] を選択し、[フォーム] ウィンドウで、SCI: で開始するすべてのフォームを選択して削除します。[フィルター] ウィンドウでも同じようにします。  注意  転送されたチケットに関する既存のワーク フロー ticketid 情報を保存する場合は、SCI:OMI:IncidentSearch フォームは削除しないでください。  3. [Remedy 管理者 – サーバー ウィンドウ] で、[ツール] メニューから [定義のインポート]、[インポート元定義ファイル] の順に選択します。  4. [ファイルのインポート] ダイアログ ボックスで、SCIOpsMgr2007Interface-63.xml を探して選択します。.xml ファイルを探すには、[ファイルの種類] の値が AR XML 定義ファイル (\*.xml) に設定されていることを確認してから、[開く] をクリックします。  5. [定義のインポート] ダイアログ ボックスの [オブジェクト カウント] テキスト ボックスで、次のオブジェクト カウントを確認します。   フォーム:3   フィルタ:34   フィルタ ガイド:2  6. [すべてを追加] をクリックして、[インポートするオブジェクト] 一覧にすべてのフォームとフィルタをを移動して、[インポート] をクリックします。 |

状態移行データ ファイルをインポートするには

|  |
| --- |
| 1. [Remedy インポート] ツールを開き、管理者権限でログオンします。  2. [フォームを開く] をクリックし、SCI:StateTransitions フォームを選択します。  3. [データ ファイルを開く] をクリックし、SCIStateTransitions.arx ファイルを選択してから [すべてを追加] をクリックします。  4. [インポートの開始] をクリックして、データ ファイルをインポートします。42 のレコードがインポートされたことを確認します。 |

Remedy AR Server v7.1 をインストールする

Operations Manager ユーザーを次のように作成します。

アプリケーション構成の権限が付いているアカウントで、BMC Remedy User アプリケーションを開きます。

Remedy アプリケーション管理コンソールを開きます。

[人物構成] の横にある [作成] リンクをクリックして、次の情報を入力します。

 名 = Operations

 姓 = Manager

 クライアントの種類 = 事務職の社員

 連絡先の種類 = テクニカル サポート

 会社 = <ユーザーの会社>

 組織 = <オプション>

 部署 = <オプション>

 サポート スタッフ = はい

 メール アドレス = (ユーザーの種類では必須です - 汎用メールアドレスを作成します)

 サイト = <プルダウン リストから適切なサイトを選択します。>

 ログイン名 = opsmgr

 パスワード = Manager

 ライセンスの種類 = 固定

 フル テキスト ライセンスの種類 = なし

 アプリケーションでの権限 = インシデント マスター、AR システム管理者 (CI データへのアクセス権があり、Asset Viewer が自動的に割り当てられる) およびインシデント ユーザー

 ユーザーは可用性が “いいえ” に設定されたサポート グループのメンバーである必要があります。

[追加] をクリックして、レコードを作成します。

重要

opsmgr ログイン名は、Remedy の Administrators グループのメンバのものである必要があります。

Operations Manager アラート チケット分類の作成:

Remedy アプリケーション管理コンソールで、[操作分類の構成] の横にある [作成] をクリックし、次の情報を入力します。

 操作分類階層 1 = “監視”

 操作分類階層 2 = “OpsMgr”

 操作分類階層 3 = “アラート"

 状態 = “有効”

 次に対して分類を有効にする = “現在の会社”

[追加] をクリックして、レコードを作成します。

Remedy ARS 用の Operations Manager 2007 R2 Connectors インターフェイス フォームおよびフィルター

Remedy AR 環境に Interop Provider コンポーネントをインストールする間、Operations Manager 2007 R2 インターフェイス フォームに加え、その他のフォームおよびフィルターを含むファイルが指定 Remedy ARS サーバーにコピーされます。これらの Remedy ARS フォームとフィルターをインポートして、Remedy ARS チケットへの Operations Manager 2007 R2 アラートのフローを有効にします。

このようなフォームとフィルターを含む .xml ファイルは、Interop Provider インストール フォルダーにコピーされます。Remedy ARS 7.1 のファイルは次のディレクトリに入っています。

C:\Program Files\System Center Operations Manager 2007 Providers\Operations Manager 2007 Connector to BMC Remedy AR System 7.1 Provider\

コネクタ インターフェイスのフォームとフィルターをインポートするには

|  |
| --- |
| 1. 管理者権限が付いているアカウントで、Remedy Administrator にログインします。  2. 既存の Operations Manager コネクタ フォームまたはフィルターが削除されていることを確認します。[Remedy 管理者 – サーバー ウィンドウ] で、ツリー表示に移動し、[フォーム] を選択し、[フォーム] ウィンドウで、SCI: で開始するすべてのフォームを選択して削除します。[フィルター] ウィンドウでも同じようにします。  重要  転送されたチケットに関する既存のワーク フロー ticketid 情報を保存する場合は、SCI:OMI:IncidentSearch フォームは削除しないでください。  3. [Remedy 管理者 – サーバー ウィンドウ] で、[ツール] メニューから [定義のインポート]、[インポート元定義ファイル] の順に選択します。  4. [ファイルのインポート] ダイアログ ボックスで、SCIOpsMgr2007Interface-71.xml を探して選択します。.xml ファイルを探すには、[ファイルの種類] の値が AR XML 定義ファイル (\*.xml) に設定されていることを確認します。次に、[開く] をクリックします。  5. [定義のインポート] ダイアログ ボックスの [オブジェクト カウント] テキスト ボックスで、次のオブジェクト カウントを確認します。   フォーム:4   フィルタ:35   フィルタ ガイド:2   メニュー:1  6. [すべてを追加] をクリックして、[インポートするオブジェクト] 一覧にすべてのフォームとフィルタをを移動して、[インポート] をクリックします。 |

状態移行データ ファイルをインポートするには

|  |
| --- |
| 1. [Remedy インポート] ツールを開き、管理者権限でログオンします。  2. [フォームを開く] をクリックし、SCI:StateTransitions フォームを選択します。  3. [データ ファイルを開く] をクリックし、Remedy 71 State Transitions.arx ファイルを選択してから [すべてを追加] をクリックします。  4. [インポートの開始] をクリックして、データ ファイルをインポートします。56 のレコードがインポートされたことを確認します。 |

付録 B - HP Operations Manager Connector

HP Operations Manager の管理ノード

HP Operations Manager (旧 OpenView Operations) は、HP Operations Manager によって管理されるノードに関連付けられたイベントのみを表示します。HP Operations Manager 用 Operations Manager 2007 R2 Connector は、イベントに関連付けられたノード名を HP Operations Manager に渡します。ノードが HP Operations Manager によって管理されていない場合、イベントは削除され、HP Operations Manager コンソールには表示されません。HP Operations Manager で管理する各 Operations Manager 2007 R2 ノードを HP Operations Manager に追加する必要があります。

ノードの追加およびノードの管理の詳細は、HP Operations Manager のユーザー向けのドキュメントを参照してください。

付録 C - IBM Tivoli Enterprise Console Connector

IBM Tivoli Enterprise Console を構成して Operations Manager 2007 からイベントを表示する方法

System\_Center\_Interop\_Configure\_TEC タスクを実行するか、IBM Tivoli Enterprise Console サーバー上で Tivoli ルール ベース を Operations Manager 2007 R2 からのアラートを受け入れるように手動で構成します。次に、IBM Tivoli Enterprise Console サーバー上でこれを行うための手順を説明します。これらの手順は、IBM Tivoli Enterprise Console がインストールされている Windows オペレーティング システムまたは UNIX システム上のコマンド プロンプトから実行する必要があります。

次の手順を続行する前に、IBM Tivoli Enterprise Console 用の Operations Manager 2007 R2 Connector の Interop Provider コンポーネントをインストールしておく必要があります。

重要

最初の手順で説明したように、Tivoli 環境の構成をSystem\_Center\_Interop\_Configure\_TEC タスクを実行する前、または手動で Tivoli ルール ベース を構成する前に行う必要があります。

Tivoli 環境を構成するには

|  |
| --- |
| 1. [コマンド プロンプト] ウィンドウを開き、次を実行します。  Windows オペレーティング システムの場合:  \Windows\system32\drivers\etc\Tivoli\setup\_env.cmd  UNIX システムの場合:  ./etc/Tivoli/setup\_env.sh  2. bash コマンドを実行して、Bourne Again シェル インタープリターを呼び出します。  3. 次をコマンド プロンプトで実行して、Tivoli 環境をセットアップします。  Windows オペレーティング システムの場合:  . /profile\_sci  UNIX システムの場合:  . /.profile\_sci |

System\_Center\_Interop\_Configure\_TEC タスクを実行するには

|  |
| --- |
|  次の構文で、wruntask コマンドを使用します。  wruntask –t System\_Center\_Interop\_Configure\_TEC –l “System Center Interop TEC Tasks” –h <TEC サーバー 管理ノード名> –a <ルール ベース名> –a {ACTIVE | EXISTING | NOCLONE} –a {<複製するルール ベース> | “\_unchanged\_”} –a {Y | N} –m 900  構文の説明  <TEC サーバー 管理ノード名> – IBM Tivoli Enterprise Console サーバーの名前です。  <ルール ベース名> – 新しい Tivoli ルール ベースに適用する名前です。  1st –a option – 更新または作成する、既存または新しいルール ベースの名前です。  2nd –a option – 複製元のルール ベースを指定します。    ACTIVE – 現在アクティブな Tivoli ルール ベースを使用します。    EXISTING – 構成された Tivoli ルール ベースを使用します。    NOCLONE – 新しいルール ベースを作成します。  3rd –a option – EXISTING を 2nd –a option に設定した場合は、複製元の既存ルール ベース名です。2nd –a option を ACTIVE または NOCLONE に設定した場合は、文字列 “\_unchanged\_” を入力します。  4th –a option –IBM Tivoli Enterprise Console サーバーを再起動するかしないかを、それぞれ Y か N で指定します。IBM Tivoli Enterprise Console サーバーを再起動しない場合、新しいルール ベースはアクティブにならず、コネクタから Operations Manager アラートは表示されません。  -m – タイムアウト時間を秒で入力します。  次は、複製する現在アクティブなルール ベースを使った wruntask コマンドの例です。  wruntask –t System\_Center\_Interop\_Configure\_TEC –l “System Center Interop TEC Tasks” –h myTECServer –a myRuleBase –a ACTIVE –a “\_unchanged\_” –a Y –m 900 |

手動で Tivoli ルール ベースを構成するには

|  |
| --- |
| 1. 次を入力して、Operations Manager 2007 R2 Connector for IBM Tivoli Enterprise Console で使用するイベント クラスを定義するクラス ファイルをインポートします。  wrb –imprbclass $SCI\_HOME/Tivoli/SCInterop.baroc <ルール ベース名>  注  ルール ベース名は既存のルール ベースである必要があります。(例:sci\_OpsMgr2007toTEC). 新しいルール ベースを作成する必要がある場合は、コマンドwrb –crtrb <ルール ベース名> を使用します。.  2. 次を入力して、Operations Manager 2007 R2 Connector for IBM Tivoli Enterprise Console クラスの処理を定義するルールをインポートします。  wrb –imprbrule $SCI\_HOME/Tivoli/SCInteropTEC.rls <ルール ベース名>  3. 次を入力して、ルール ベース ターゲットにルールをインポートします。  wrb –imptgtrule SCInterop <ターゲット – 通常 “EventServer”> <ルール ベース名>  4. 次を入力して、ルール ベースをコンパイルします ({ } 括弧は、–trace が省略可能であることを示す構文です)。  wrb –comprules {-trace} <ルール ベース名>  5. 次を入力して、ルール ベースを読み込みます。  wrb –loadrb –use <ルール ベース名>  6. IBM Tivoli Enterprise Console サーバーの停止:wstopesvr  7. IBM Tivoli Enterprise Console サーバーの開始:wstartesvr  8. sciCreateTECEvtFile.sh ファイルを IBM Tivoli Enterprise Console スクリプト ディレクトリにコピーします。次の例では、既定のディレクトリを想定しています。  cp $SCI\_HOME/Tivoli/sciCreateTECEvtFile.sh $BINDIR/TME/TEC/scripts |

付録 D - Universal Connector

アラート メッセージ統合論理の例

「[Universal Connector の使用](#z3be1ec3e24204bf898c54061bc95dd9b)」セクションで説明したように、Interop Provider が保存したアラート メッセージのコンテンツを変換して Universal Connector を使用しているリモート システムに転送する必要があります。次に、このタスクでの開始点として使用できる Windows PowerShell スクリプトの例を示します。これらのサンプルでは、リモート システムは EMS エミュレーターとして指定されています。

新しいアラートを処理するスクリプト

# Copyright (c) Microsoft Corporation.All rights reserved.# # Universal Connector 経由で転送された Operations Manager 2007 R2 # から受信されるアラートを処理するサンプル スクリプト。 #

## Operations Manager から転送されたアラート XML ファイルへのパス。$FromOMPath="C:\Program Files\System Center Operations Manager 2007 Providers\Operations Manager 2007 Connector to Microsoft Universal Provider\UnvEvents\FromOpsMgr"

## EMS エミュレーターへのパス。$EMSPath="C:\Program Files\EMSEmulator"

## Operations Manager に送信される XML ファイルへのパス。$ToOMPath = "C:\Program Files\System Center Operations Manager 2007 Providers\Operations Manager 2007 Connector to Microsoft Universal Provider\UnvEvents\"

## EMS EMulator Config からの次のチケット番号。$EMSConfigFile=$EMSPath + "\config\EMSEmulatorConfig.xml" $EMSConfigxml = [xml] (get-content $EMSConfigFile) $NextTicket = [int] $EMSConfigxml.EMSConfig.NextTicket

## Operations Manager からのアラート XML ファイルを読み取る。$alertfiles = (get-childitem -path $FromOMPath -include \*.xml -recurse)

foreach($alertfile in $alertfiles) { $xml= [xml](get-content $alertfile)

# 新規アラート処理 - EventType = 0 if ($xml.UNVEvent.EventType = "0") {

# カスタマー アプリケーションにアラートを挿入する論理を追加。# 続いてシミュレーション。$newelem = $xml.CreateElement("TicketNumber") $newelem.set\_InnerText($NextTicket) $xml.UNVEvent.AppendChild($newelem) $newFile=$EMSPath + "\" + $NextTicket + ".xml" $xml.save($newFile)

# 新規アラートの確認を作成し、TicketNumber を返す。$ackxml = new-object System.Xml.XmlDocument

# ルート ノードの作成。$ackroot = $ackxml.CreateElement("UNVEvent") $ackxml.appendchild($ackroot)

# ackxml に EventType を追加。$ackelem = $ackxml.CreateElement("EventType") $ackelem.set\_InnerText("2") $ackroot.AppendChild($ackelem)

# ackxml に AlertId を追加。$ackelem = $ackxml.CreateElement("AlertId") $ackelem.set\_InnerText($xml.UNVEvent.AlertId) $ackroot.AppendChild($ackelem)

# ackxml に EventID を追加。$ackelem = $ackxml.CreateElement("EventId") $ackelem.set\_InnerText($NextTicket) $ackroot.AppendChild($ackelem)

# ackxml に ManagementGroup を追加。$ackelem = $ackxml.CreateElement("ManagementGroupName") $ackelem.set\_InnerText($xml.UNVEvent.ManagementGroupName) $ackroot.AppendChild($ackelem)

# XML 概要の追加。$xmlintro = $ackxml.CreateProcessingInstruction("xml", "version='1.0'") $ackxml.InsertBefore($xmlintro, $ackroot)

# MgmtGroup ディレクトリを確認し、存在しない場合は作成。$MGdir = $ToOMPath + $xml.UNVEvent.ManagementGroupName $ackFile = $MGdir + "\" + $NextTicket + ".xml"

if (!(Test-Path $MGdir)) { mkdir $MGdir }

$ackxml.save($ackFile)

remove-item $alertfile

$NextTicket++ }

}

# 新しい NextTicket 値で EMS Config ファイルを更新。$EMSConfigxml.EMSConfig.NextTicket = [string] $NextTicket $EMSConfigxml.save($EMSConfigFile)

Operations Manager アラート更新を処理するスクリプト

# Copyright (c) Microsoft Corporation.All rights reserved.# # Universal Connector 経由で転送された Operations Manager 2007 R2 # から受信されるアラートの更新を処理するサンプル スクリプト。 #

## Operations Manager から転送されたアラート XML ファイルへのパス。$FromOMPath="C:\Program Files\System Center Operations Manager 2007 Providers\Operations Manager 2007 Connector to Microsoft Universal Provider\UnvEvents\FromOpsMgr"

## EMS エミュレーターへのパス。$EMSPath="C:\Program Files\EMSEmulator"

## Operations Manager に送信される XML ファイルへのパス。$ToOMPath = "C:\Program Files\System Center Operations Manager 2007 Providers\Operations Manager 2007 Connector to Microsoft Universal Provider\UnvEvents\"

## Operations Manager からのアラート XML ファイルを読み取る。$alertfiles = (get-childitem -path $FromOMPath -include \*.xml -recurse)

foreach($alertfile in $alertfiles) { $xml= [xml](get-content $alertfile)

# アラート更新プロセス - EventType = 1 if ($xml.UNVEvent.EventType = "1") {

# Operations Manager からのデータでカスタマー アプリケーションを更新する論理を追加。# 続いてシミュレーション。# 更新のものと一致するチケットを検索。$EMSfilename = $EMSPath + "\" + $xml.UNVEvent.EventId + ".xml" if ((Test-Path $EMSfilename)) { # Get matched Ticket $existingTicket = [xml] (Get-Content $EMSfilename)

# 解決状態の更新。$existingTicket.UNVEvent.ResolutionState = $xml.UNVEvent.ResolutionState $existingTicket.save($EMSfilename)

}

# 新規アラートの確認を作成し、TicketNumber を返す。$ackxml = new-object System.Xml.XmlDocument

# ルート ノードの作成。$ackroot = $ackxml.CreateElement("UNVEvent") $ackxml.appendchild($ackroot)

# ackxml に EventType を追加。$ackelem = $ackxml.CreateElement("EventType") $ackelem.set\_InnerText("3") $ackroot.AppendChild($ackelem)

# ackxml に AlertId を追加。$ackelem = $ackxml.CreateElement("AlertId") $ackelem.set\_InnerText($xml.UNVEvent.AlertId) $ackroot.AppendChild($ackelem)

# ackxml に EventID を追加。$ackelem = $ackxml.CreateElement("EventId") $ackelem.set\_InnerText($xml.UNVEvent.EventId) $ackroot.AppendChild($ackelem)

# ackxml に ManagementGroup を追加。$ackelem = $ackxml.CreateElement("ManagementGroupName") $ackelem.set\_InnerText($xml.UNVEvent.ManagementGroupName) $ackroot.AppendChild($ackelem)

# XML introduction の追加。$xmlintro = $ackxml.CreateProcessingInstruction("xml", "version='1.0'") $ackxml.InsertBefore($xmlintro, $ackroot)

# MgmtGroup ディレクトリを確認し、存在しない場合は作成。$MGdir = $ToOMPath + $xml.UNVEvent.ManagementGroupName $ackFile = $MGdir + "\" + $xml.UNVEvent.EventId + ".xml"

if (!(Test-Path $MGdir)) { mkdir $MGdir }

$ackxml.save($ackFile)

remove-item $alertfile

}

}

Operations Manager へのリモート システム更新を処理するスクリプト

# Copyright (c) Microsoft Corporation.All rights reserved.# # EMS エミュレーターのチケットの終了をシミュレートし、# Operations Manager の対応するアラートを終了するのに必要なファイルを作成するサンプル スクリプト。 # param($CloseTicket)

## Operations Manager から転送されたアラート XML ファイルへのパス。$FromOMPath="C:\Program Files\System Center Operations Manager 2007 Providers\Operations Manager 2007 Connector to Microsoft Universal Provider\UnvEvents\FromOpsMgr"

## EMS エミュレーターへのパス。$EMSPath="C:\Program Files\EMSEmulator"

## Operations Manager に送信される XML ファイルへのパス。$ToOMPath = "C:\Program Files\System Center Operations Manager 2007 Providers\Operations Manager 2007 Connector to Microsoft Universal Provider\UnvEvents\"

## 終了するチケット番号。#$CloseTicket=$arg[0]

# EMS でチケットの終了をシミュレート。

# Operations Manager からのデータでカスタマー アプリケーションを更新する論理を追加。# 続いてシミュレーション。# 更新のものと一致するチケットを検索。$EMSfilename = $EMSPath + "\" + $CloseTicket + ".xml" if ((Test-Path $EMSfilename)) { # Get matched ticket. $existingTicket = [xml] (Get-Content $EMSfilename)

# 解決状態の更新。$existingTicket.UNVEvent.ResolutionState = "Closed" $existingTicket.save($EMSfilename)

# コネクタで選択するファイルを作成し、Operations Manager アラートを終了する必要あり。$closexml = new-object System.Xml.XmlDocument

# ルート ノードの作成。$closeroot = $closexml.CreateElement("UNVEvent") $closexml.appendchild($closeroot)

# closexml に EventType を追加。$closeelem = $closexml.CreateElement("EventType") $closeelem.set\_InnerText("1") $closeroot.AppendChild($closeelem)

# closexml に AlertId を追加。$closeelem = $closexml.CreateElement("AlertId") $closeelem.set\_InnerText($existingTicket.UNVEvent.AlertId) $closeroot.AppendChild($closeelem)

# closexml に ManagementGroup を追加。$closeelem = $closexml.CreateElement("ManagementGroupName") $closeelem.set\_InnerText($existingTicket.UNVEvent.ManagementGroupName) $closeroot.AppendChild($closeelem)

# closexml に ResolutionStateto を追加。$closeelem = $closexml.CreateElement("ResolutionState") $closeelem.set\_InnerText($existingTicket.UNVEvent.ResolutionState) $closeroot.AppendChild($closeelem)

# XML 概要の追加。$closeintro = $closexml.CreateProcessingInstruction("xml", "version='1.0'") $closexml.InsertBefore($closeintro, $closeroot)

# MgmtGroup ディレクトリを確認し、存在しない場合は作成。$MGdir = $ToOMPath + $existingTicket.UNVEvent.ManagementGroupName $closeFile = $MGdir + "\" + $existingTicket.UNVEvent.TicketNumber + ".xml"

if (!(Test-Path $MGdir)) { mkdir $MGdir }

$closexml.save($closeFile)

}

免責事項

サンプル スクリプトは、すべての Microsoft 標準サポート プログラムまたはサービス下でサポートされているわけではありません。サンプル スクリプトは、いかなる保証もなく現状有姿で提供されています。さらに、Microsoft は商品性または特定の用途での適性の暗示保証を含む (ただし必ずしもこれらに限定されない) 一切の暗示保証に対する責任を放棄します。サンプル スクリプトおよびドキュメントの使用またはパフォーマンスに起因するリスクは一切、ユーザーが負うものとします。Microsoft、作成者、またはその他スクリプトの作成、製作、提供などの関係者はいかなる場合においても、サンプル スクリプトおよびドキュメントの使用または誤使用に起因する一切の損害補償 (収益の損失、業務の中断、業務関連情報の損失、またはその他の金銭上の損失に対する損害補償を含むが必ずしもこれらに限定されない) に責任を持ちません。これは、Microsoft がそのような損害賠償の可能性について知らされていた場合にも適用します。